明治四十一年四月二十日發行

（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第二百二十一號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
内務省許可明治二十一年三月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第貳百貳拾壹號目次

講演

叢談

育兒

講義

質疑

雜報

大日本婦人衛生會記事

大日本婦人衛生會

五月例會通知

來る五月二日(第一土曜日)午後一時半より神田區一ツ橋通り女子職業學校内に於て例會を開き左の講話有之候間萬障御繰合せ御知友御誘引御來會被下度候也

一小兒の皮膚病　醫學士　志立富松君

一身體及び其保護(續)　ドクトル　富士川游君

明治四十一年四月　私立大日本婦人衛生會

●會　告●

今般都合により本會事務所を左記の處へ移轉す

東京市麹町區富士見町二丁目三十二番地

私立大日本婦人衛生會

明治四十一年四月

會計整理の都合も有之候間會費未納の御方は此際本會事務所へ宛何卒至急御送附被成下度候也

本會の振替貯金口座番號一〇六〇〇番に付右番號を御承知の上所在の郵便局に於て該用紙御請取被下指定の欄内へ送金高、拂込人住所氏名、及び加入者住所氏名（即ち本會）等を記入し同時に金圓御拂込相成候はゞ直ちに本會へ送金無料にて相届き且つ途中紛失及び盗難の憂ひも無之候又該用紙裏面に通信文欄有之候間他に用事ある節は何なりとも御記入差支無之候、右の如く拂込人に取りては安全、輕便、經濟等一擧にして種々の利益ある便法に付自今該法を御利用被下度此段會員諸姉に稟告致候也

○本年一月發行の本誌には會員諸姉の御便宜を謀り振替貯金拂込用紙を添付致置候間そを御用ゐ被下度候

○爲替御送附の節は本會事務所宛にて麹町區富士見町郵便局へ御振出しを乞ふ

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんを得とも希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆婦人のもつぱら學ぶべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を拂はざるもの〻如くまことに口惜しきことなり因て頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ且相研究し尚之を筆記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を敍べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治廿一年十一月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會全般の幸福を增進するにあり

●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

●第四條　入會の際は姓名族稱住所及會員の紹介を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續は本に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし

●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上、特別會員は一ケ月金三拾錢以上、通常會員は一ケ月金拾五錢を納むる者とす

●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得

●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず

●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を推し皇族の[illegible]殿下に願出るものとす

●第十條　本會に左の役員を置く　會長一名　副會長二名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命す但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし

●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は所要なる會務を評議し書記は役員の命を受け會計及雜務を掌る幹事の分擔を設け第一會計部第二編輯出版部第三庶務とす

●第十三條　臨時指名委員の件

●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ケ年とす但滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す

●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の給料を給す

●第十六條　本會を例會總會及評議員會とす例會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め懇親會を開くことあるべし

●第十七條　例會には經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑托し會員をして[illegible]聽講せしむるものとす

●第十八條　會員は家族の婦女若くは知人の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を聽聞せしむることを得（但衣服は總て質素なるべき事）

●第十九條　講義演說等は[illegible]を禁す

●第二十條　規則の改正其他重要の會議定のこと

●第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算并に庶務の概要を會員に[illegible]報告すべし

●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事捺印を要するものとす

●第廿四條　會計は一ケ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會

●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會にの承認を受け支會を設立することを得

●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記録して申出べし[illegible]議あるときは其旨を支會より本會事務所に報告すべし本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす

●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得

●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其實費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ

●第廿九條　支會は毎會の景況其狀況を本會に報告すべし

●雜件

第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に贈附すべし

●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは其他物品を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り且其寄附者の姓名及品目を雜誌に揭載し併本會雜誌を以て報告すべし

●第卅二條　會費には受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）

●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（麹町區富士見町郵便取扱所宛）に振出しあるべし

●第卅四條　會員中若し本會の障礙となるべき所爲ある者又は屢〻會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麹町區富士見町二丁目廿二番地

私立大日本婦人衛生會

○役員姓名

總裁　東伏見宮依仁親王妃周子殿下

會長　侯爵夫人　鍋島榮子

副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

幹事　鳩山春子
同　羽田三緒子
同　岡田德子
同　高木かう子
同　山本多穗子
同　松平芳子
同　三浦敎子

評議員　石川貞子
同　岩下ゆか子
同　濱田捨子
同　長谷川仲子
同　仁禮壽賀子
同　西升子
同　穗積歌子
同　土肥多越子
同　緒方悅子
同　岡山とし子
同　小川孝子
同　男爵夫人　加藤鈴子
同　片山龜子
同　吉武輝枝子
同　丹波貞子
同　高橋孝子
同　田村きよ子
同　男爵夫人　南部限子
同　中濱芳子

評議員　子爵夫人　山口貞子
同　松井正子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　宮本樂子
同　宮下咲子

●支會、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別賛成員

（●は本會の爲め講演又は執筆せられし諸氏）

醫學博士　●入澤達吉君
理學博士　●飯島魁君
ドクトル　●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學博士　●伊東祐彥君
ドクトル　●飯盛挺造君
醫學博士　●伊藤隼三君
理學博士　●石川千代松君
赤十字社內科主任　岩井禎造君
醫學博士　●石原久君
醫學士　●磐瀨雄一君
醫學士　●石原喜久太郎君
貴族院議員　濱尾新君
醫學博士　●濱田玄達君
法學博士　●鳩山和夫君
東京　萩原猶四郎君
醫學博士　●芳賀榮次郎君
●長谷川泰君
新潟　●長谷川一許君
小兒科　●小原和之君
醫學博士　●岡田榮吉君
醫學博士　●林作雄君
醫學博士　●佐藤達次郎君
醫學博士　●緒方正規君
步兵中佐　●堀內文次郎君
醫學博士　●土肥慶藏君
醫學博士　●岡田和一郎君

醫學博士　●大澤謙二君
醫學士　●大西秀治君
醫學博士　●大澤岳太郎君
一等藥劑官　●恩田重信君
醫學士　●若杉喜三郎君
醫學士　●渡邊房吉君
男爵　●加藤弘之君
醫學博士　●加藤照麿君
醫學士　●賀古鶴所君
醫學博士　●河本重次郎君
醫學博士　●片山國嘉君
醫學士　●川上雅晁君
醫學博士　●櫻田龜一郎君
醫學博士　●金杉英五郎君
醫學博士　●笠原光興君
醫學士　●唐澤光德君
醫學士　●河野衞君
醫學博士　●高橋順太郎君
ドクトル　●高山紀齋君
醫學博士　●高木兼寛君
法學博士　●高木豐三君
醫學博士　●田代義德君
新潟　●田代亮助君
男爵　●高崎正風君
醫學士　●竹中成德君
醫學士　●高田耕安君
新潟病院長　●高橋辰五郎君
藥學博士　●丹波敬三君
醫學士　●高橋貞頼君
藥學博士　●田原良純君
醫學士　●山村光顯君
醫學博士　●久保猪之吉君
醫學士　●米山彥郎君
二等軍醫正　●星野葆光君
醫學士　●宮本叔君
三等軍醫正　●横井忠國君
大日本敎育會會長　辻新次君
理學博士　●坪井正五郎君
醫學博士　●長與稱吉君
男爵　南部數男君

藥學博士　●長井長義君
醫學博士　●遠山椿吉君
醫學博士　●中濱東一郎君
醫學士　●黑田玄通君
醫學士　●栗本術勝君
海軍中佐　●小笠原長生君
醫學士　村松紙三君
醫學博士　●隈川宗雄君
醫學博士　●栗本東明君
醫學博士　●山田織三君
醫學士　●山田弘倫君
醫學士　●山根正次君
岡山　●山川春二君
衞生試驗所技手　●丸山長四郎君
ドクトル　●松山陽太郎君
ドクトル　●此木信六郎君
盲啞學校長　●小西信八君
廣島　小泉賀君
醫學士　●古川榮君
東京　●布施正顯君
南滿洲鐵道總裁　●後藤新平君
元帝國大學教授　●エ、ベルツ君
醫學士　●甲野榮君
文部書記官　●寺田勇吉君
醫學士　●寺田牧作君
醫學士　●寺田織尼君
子爵　●秋元興朝君
前軍醫總監　●足立寛君
ドクトル　●新井古方君
ドクトル　●富士川游君
高崎醫院長　●土谷全次君
産科婦人科　●水原漸君
ドクトル　●久保川誠藏君
醫學博士　●佐々木政吉君
醫學士　●淺田決君
醫學博士　●朝倉文三君
ドクトル　●朝山義六君
醫學博士　●吾妻勝剛君
醫學博士　●佐藤三吉君
醫學士　●櫻井郁二郎君

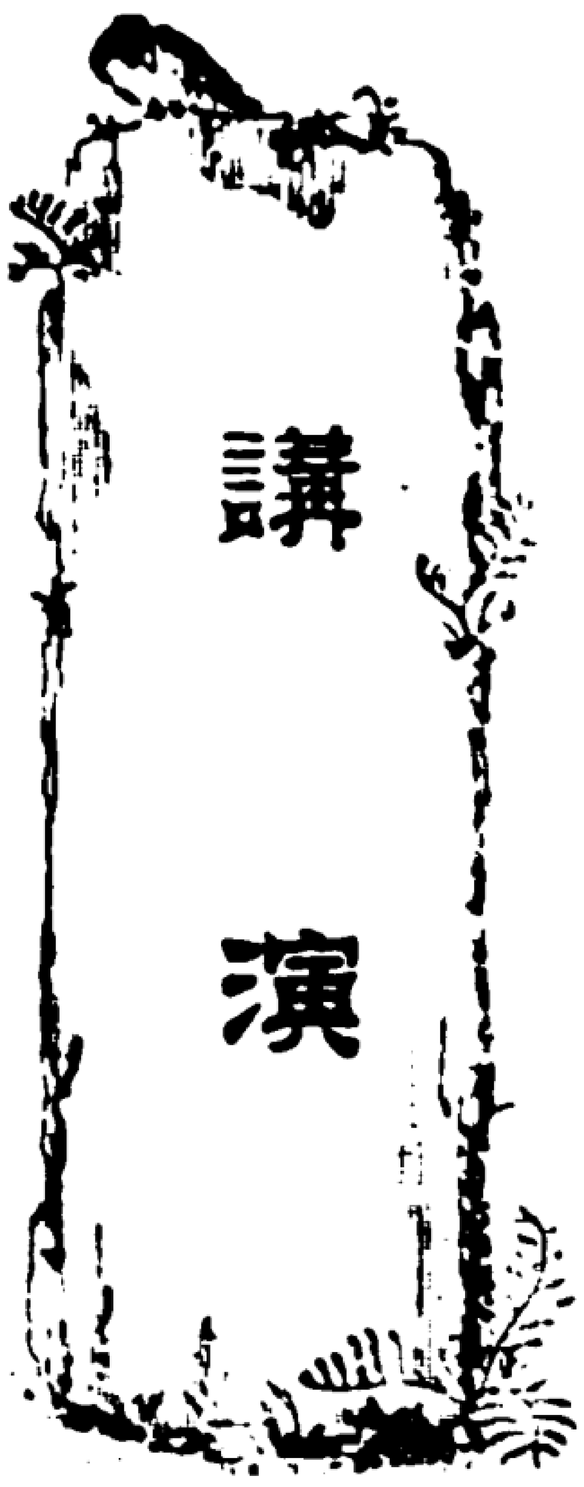
ドクトル　●佐伯理一郎君
醫學博士　●榊順次郎君
醫學博士　●榊保三郎君
醫學士　●佐藤得齋君
醫學博士　●櫻井恒次郎君
醫學博士　●桐淵銳次君
醫學士　●北村精造君
醫學博士　●北島多一君
ドクトル　●北川乙治郎君
醫學博士　●木下正中君
醫學士　●北島小太郎君
醫學博士　●北里柴三郎君
醫學博士　●三浦守治君
醫學博士　●三浦謹之助君
小兒科專門　●宮本仲君
理學博士　●箕作佳吉君
醫學博士　●三島通良君
醫學博士　●三宅秀君
醫學博士　三輪信太郎君
伯爵　土方久元君
醫學博士　●島村俊一君
醫學博士　●弘田長君
ドクトル　●日高昇君
ドクトル　●須田卓爾君
醫學士　●濱川德君
醫學博士　●木村德衞君
醫學博士　●森林太郎君
醫學士　●熊川三男三君
醫學士　●波多野松君
醫學博士　●吳秀三君
ミス　●リツテル君
ミス　●ヒユース君
ミセツス　●コーツ君
ドクトル　●菊池衞一君
醫學士　●橋本左武郎君
醫學士　●鳥居春洋君
醫學博士　●土川卯三郎君
ドクトル　●佐藤運雄君
ドクトル　●西山信光君
醫學士　●澤崎寛制君



藤澤道場一遍上人繪卷七
(約六百年前)



志貴山緣起尼君卷
(約七百年前)



我邦婦人の歩容

醫學博士　田代義德君講演

私の皆さんに申上げやうと思ふことは「我邦婦人の歩容」即ち皆さんの歩きつき、足つきでも宜しい、此御話は自から進んで此處で述べたいと云ふ希望で今日出でたのであります、どうか私の話を御聽き下すつた上に、御批評を願ふことが出來れば幸であります。

先づ第一に我邦婦人の歩容と云ふて、何故に男子を除いたかと云ふと、男子の歩きつきに付ては、私の見る所では、西洋も日本も各人種に付て同樣に思ひます、獨り婦人の歩き方になると、我國は特別に思つて居ります、是は西洋人を私が現に見たり、又婦人のことに關した書物が澤山出來て居りますが、其書物に畫いてある圖を見ても、足つきの工合は男子と婦人と異なつて居らない、どう見ても同じであります、然るに例へば往來で以て注意して日本の婦人の歩きつきを見ると、即ち貴賤老若を問はず、多く所謂内足に歩く、即ち足の爪先を内方にして歩く人が多い、殆ど三分の二若くは四分の三位あります、現に私が往來に立つて見た結果である、獨り往來に立つて見たのみならず、繪畫彫刻等に現はれて居るものにも、矢張内足に出來て居ります、皆さんが昨年の東京勸業博覽會で白木屋の飾人形を御覽で御座いましよう、羽子をついて居る所であります、大抵内足になつて居ります、それから能く私が散歩して伊藤松坂(呉服店)の電氣婦人と云ふのを見たことがあります、皆さんの内にも見た方もありませう

が、あれも内足に出來て居ります、それから彫刻の方で言つて見ると、總ての彫刻に現はれて居る婦人が内足と云ふ譯ではありませぬが、是も内足の方が多い、マアさう云ふやうな工合でありまして、現に昨日配達になつて來た女鑑を見た、其女鑑の口繪に貴婦人が大變椅子に腰を掛けて現はれて居るが、大抵内足になつて居る、女鑑を御購讀になつて居る方は御覧になりましたらう、大抵我國の婦人は足つきは内足になつて居ると云つて差支ないのであります、是は自分でも思つて居りまするし、他の方々に聞いても内足だと云ふ方が多いです、先づ我國に於ける婦人の足つきと云ふものは歩く時分には内足であると云ふことは斷定したものと云つて差支ない、そこで先程も述べる通り、各國の婦人に我國婦人の如き足つきの者を見る場合はない、例へば歐羅巴婦人の歩くのを御覧なさい、必ず足尖が外部を向いて居る、但し婦人の歩きつきが男子と異なる所は、小足に歩くと云ふことは、是は同じでありますが、足を少しきざんで歩くと云ふことは、西洋人も日本人も是は婦人の特性であります、併ながら足尖の位置は歐羅巴婦人は外部に向いて居ります、それであるから内足に向いて居る人は醫者の治療を請ふと云ふ位であります、是は吾々が靴を穿いて居る人を御覧になれば分るのであります、靴を穿いて居る人が内足に歩く所を見ると、何となく見惡いと思ふのであります、實に直覺的に見惡いかと思ふのです、例へば私自身も急いで歩くと少し内足になります、餘り急いで歩いて疲れて來ると内足になつて來るのであります、男などは殊に見惡く思はれます、歐羅巴ではそれですから内足は殆ど病氣の中になつて居りますから治療をするのであります、私の話に聞いて居る所に依れば、昔の歳を老つた方には、昔内足に歩くと云ふことを認めたのみならず、却て勸めた場合がある、是は私が或婦人に聞いたのであるが、其婦人の話に内足に歩かぬと家の母から叱られるから内足に歩くのであります、ですから内足に歩くと云ふ

時代も必ずあつたことも事實であります、さうしますると、內足外足、或は眞直に歩く方もありますけれども何れが良いものであるか、何れが生理的で、何れが病氣的であるか、或はどう云ふ風に歩く方が良いかと云ふことになります、それで勿論斯う云ふ風なことは病氣と云ふにも至らぬことです、けれども併ながら人間は頭の先から足の爪先に至るまで出來るだけ美觀を供へたしと希望するものでありますから、少しでも人をして見惡い感覺を起させないやうにしなければならない、是は私が御話しなくとも何人も同感と思ひます、少しも人の不快を買はぬやうに、頭の先から足の爪先まで注意すべきことであります、それでありますから些細な問題であるが、出來るだけ良いとか或は美しいとか、何れにしても或理想に近い方に判斷して置く方が宜しい、それであるから第一にどう云ふ風に歩くのが美しいと云ふ方の理想に近いかと云ふことを研究したい、又それが極つたならば、さう云ふ風に歩くが宜しいと云ふのであります。

先づ第一に、內足、眞直足、外足何れが生理的であるかと云ふことを、解剖及生理學の點から極めることが出來るかどうか、解剖でありますると、足は斯う云ふやうに骨の中に這入つて居ります、是が內踝に是が外踝と云ふやうな工合になつて居ります(圖を示す)此中に骨が這入つて居ります、故に足の爪先が眞直に行くべきであります、併し足は眞直になつて居つて、多少外にも行く內にも行く働きを有つて居ります、何となれば足の骨は一つの骨でなくして數個の骨で組立られて居ります、關節と云ふものが動くのであります、それでありますから骨骼の方から論じて行くと內足になつて居らうが、外足になつて居らうが或程度までには病氣と云ふことはない、何ちらになつても差支ない、生理學の方から云ふと、足と云ふものは體重を捧げて、其體軀の重みを二本の足で支へて居ります、然らば支へる際に自分の身體が非常に重い、若くは重い物を脊負つた

と云ふ場合、どうしたら宜いか、其場合には自然に足を廣げるに違ひない、重い物を脊負つて歩く人は必ず股を少し廣げるやうになつて來る、是は皆さんが重い物を上げるとか、或は運動會などで綱引をする場合には、決して兩足を小さくして引くと云ふことはない、必ず兩足を廣げると土臺が廣くなるから從つて力が出る譯になるのであります、股を廣げる、廣げれば廣げる程重力を支へることが出來る、それでありますからして重い身體を長く支へて行かうと云ふのには、どうしても足を外へ廣げると云ふことになる、唯眞直に足を廣げても宜いが、併し恰好が良くない、さうするとどうなるかと云ふと、股の後ろを相接して爪先だけ開くことになる、殊に婦人でありまするから、多少重みを持つと云ふ場合にも自分の身體を亂さぬと云ふ考へは誰人でもありますから、出來るだけ、普通の言葉で言へば體裁を繕ふと云ふ、それには唯股を廣げたのではいけない、多少股の後の方を相接して爪先の方を開く、それですからどうしても生理學の方では足と云ふものは重力を支へるものだと云ふ理窟から行くと、足を開いて行く方が正しいのであります、どうもそれ以上解剖及び生理の點から言つて內足外足の議論は出來ない、若し出來るならば斯う云ふことがある、皆さんが走る時分にどうなるかと云ふと、走る時分には必ず屈むのであります、斯うなる時分には足を早く出さうと云ふので、體重を先きへやると足を出來るだけ曲げる、仰向いて駈けると云ふことは必ずない、それで日本の婦人は身體が少し猫脊な方が多い、體重が前に來る、前に來ると云ふと勢ひ足を早くしなければならない、是はどの位身體の姿勢に影響するか能く分りませぬが、理窟はさう付けられる、それでありますから足を早く出すには、爪先ばかり立てなければならぬ、それで內足と云ふやうにする、所謂チヨコ〳〵歩き、男は大踏濶歩婦人は小踏促歩、是は兎に角解剖生理の點から論じて行けば右の二點より仕方がない、それからして體重を能く支へると云

ふ點から言へば少しく開くと云ふこと、それ以上に理窟はありませぬ、それでありますから歩き方に關する問題は解剖生理學の方の點から餘り有力な議論ではない、どちらでも宜しいと云ふことになる、さうすると我國の婦人は內足に歩いて居るが、是は昔から內足に歩いたものであるか、外足に歩いたものであるか、是は風俗上の壓制と云ふものが婦人の身體には能く現はれて居る、例之ば西洋の婦人は「コルセット」で胴を狹くするやうにします、それであるから十分に盛裝して會などに行つても西洋婦人は食事が十分出來ない、身體を固く締める爲に肝臓などはちぎれると云ふ位であります、是は風俗上の壓制が身體に及ぼしたる著明なる影響であります、然らば支那人は女子が生れて間もなく足を縛つて足を小さくして仕舞ふ、是は纏足と云ふので、唯足を出來るだけ極端に小さくするまでゞある、誰でも足の大きいのが宜いと云ふ者はない、殊に西洋では小さな靴を穿くのであります、日本でも成たけ小さな足袋を穿きたいと思ふのは誰方にもあらうと思ふ、それですから小さな手にしたいとか、小さな足にしたいとか云ふことは、モウ是は普通の婦人の思想であります、能く西洋人が日本婦人を見て羨むのは日本人は手と足が可愛らしいと直ぐ言ふのであります、さう云ふ風に足の小さいと云ふことは風俗上婦人は至極美しいと見られて居るのです、唯支那人は極端に走つて居ると云ふのであります、兎に角風俗上の壓制がそこまで行つて居る、そこで我國は二千年なり三千年なりの歷史を有して居る人民でありますから、風俗上に何か影響が現はれて居りはせんかと云ふことを調べて見ると、內足と云ふことが風俗上の壓制に現はれて居ります、西洋婦人の「コルセット」支那人の纏足、日本人の內足、鼎の足のやうに現れて居るものではないかと想ふ、どう云ふことであるかと歷史を調べて見ましたのです、此處にあるのは遠くの方は能く見えないかも知れませぬが、此小さな繪は私が博物館へ行つて繪卷物を寫したのであり

ます悉く考證正確なものです、是は藤澤道場一遍上人の繪卷物を寫したもので、時代が約七百年前であります、さう云ふ風に一遍上人の繪卷物、それから伴大納言繪詞とか、それだけが約七百年前の風俗繪であります、(口繪參照)日高川が四百年前、マア五百年前の風俗繪と云ふものは餘りないのであります、日本では風俗繪と云ふものは極く少ないのです、德川時代には盛んになりましたが、其前には餘りありませぬ、斯う云ふ様な歴史上のことは私には能く分りませぬが、兎に角五百年前七百年前の繪卷物の婦人は皆外足であります、浮世繪が起つて德川時代になつてどうであるかと云ふと、此處に浮世繪を私が二三葉出して置きましたから、是が先づ浮世繪では一番古い、德川の初年元祿まで、其次には廣重、浮世繪を御覧になります時に、若し此問題に付て興味を持つて居つて浮世繪を御覧になれば宜しいと思ひます、德川の頃で私の見た所では此繪は英泉、國貞、此繪卷物までは無論外足です、事に依れば廣重もさうかも知れない、又皆さんが能く御存知の歌麿が出て來まして、此歌麿のあたりは皆外足であります、北齋でもさうであります、それから漸く香蝶樓國貞です、此頃になつてから内足になつて居るのが多い、是は皆さんがどちらから見ても著明に内足になつて居りますから、是は北齋の描いた有名なものであります、是は著名の外足になつて居ります、(繪を示す)尙ほ此處に皆さんにお目に懸けるのは、是は西洋での塑像の最も有名な婦人像であります、是等は皆さんが御覧なすつて足つきを御覧になつて下さい、非常な有名な人の描いたものであります、先づ私の調べた所では恰度是が天保時代ですから、今より七十年前です、浮世繪に現れた内足と云ふものは七十年前からです、それですから先づ風俗畫と云ふものは、其時代の風俗を代表して居ると云ふことであるならば、内足は新らしいのであります、是は私は實に想像以外でありました、モッと古いことゝ思つて居りました、皆さんが白木屋へ行つて此間時代人形

を御覧になつたことがございませう、辰巳藝者はチヤンと内足に歩いて居ります、奈良朝時代、鎌倉時代は座つたり何かして居から分りませぬが、辰巳藝者は歩いて居るから分るのであります、彼の時代は德川時代である、小説の盛んの時代である、馬琴とか種彦とか、爲永春水などが出た時代でありますから、彼の頃から内足になつて居ります、恐らくは彼の頃から内足に歩くと云ふ風俗が始まつたものではないかと思つて居ります、是は確かには分りませぬが、繪畫に現れた點よりしてさう云ふ風に想像して居ります。

然らばどうして内足になつて來たかと云ふ所の問題です、是は非常な色々な原因が相集つて内足になつて居らうと思ふ、中には内足と云ふことは性來内足の人もあるし、又強いて内足にした人も澤山あるが、今日の問題になるのはさう云ふ風の人である、性來内足の人は除いて、風俗上内足に歩く者がある、又別に風俗上美觀を添へると云ふやうな、考へなく無意識に内輪に歩いた者もあるに相違ない、兎に角どうして内輪に歩いて來たかと云ふことは、どうも矢張内足と云ふのは美しく見えると云ふのが主なる原因に相違なからうと思ふのです、どうして内足に歩くかと云ふと、何か作法上の關係でもあるか、例之ば疊ざはりだとか、其時分の關係で内足に歩くことを以て美しいものとしたのではないかと考へる、併しながら作法に關した書物を自分も調べて見ましたけれども、どうも足つきに關したことは書いてない、念の爲に女子高等師範の佐方敎授に面會して、作法上足つきに關したことをどう敎へるかと云ふて尋ねました同氏は唯眞直に歩けと敎へると云ふことです御承知の如く作法であるとか、體操であるとか云ふやうなことは、是は正しい姿勢とか、正しい歩きつきと云ふことの手本に敎へるのであると思ひます、法作の時だけと云ふのではいけない、それで居住座臥作法の時分の心意あるを肝要と思ひます。卽ち體操なり、作法なりと云ふことは一番宜しい理想的に

正しいことを示したものでありますから、縦令それに違つても、出來るだけそれに近い法則を採るのが然るべきであらうと思ふ。先づ作法に關しては書物等に就て調べて見ても足つきの現はれたことなし、然らばどう云ふ風に作法の先生はやる、佐方先生は眞直に歩けと云ふのでありますが、併し他には矢張内足にしろと云ふ人もあるよし或人などは私の娘はどうも外足であるから八ケ間敷く内足に歩けと云ふけれども、學校では外足に歩けと云ふ、兎に角内足と云ふことは或時代に於ては咎めないところが寧ろ奬勵した場合があると思つて居ります。

何故さう云ふ風に内足に歩くかと云ふと、是は衣服等が主なる關係であらうと思ふのです、どうしても脛を現はさないやうにする、足を開くと脛が露はになるから、足を外に開かないで衣服を卷くやうにして行くべきものだらうと思ふ、そこで例之ば昔外八文字に歩くと云ふことがあつた、是れも或人に聞いた、八文字と云ふことに、外八文字内八文字と云ふことがあるが、外内と云ふ區別はない、八文字は必ず爪先を内にするものだ、何となれば八文字に歩くと云ふ婦人は澤山の衣服を著る、殊に裾が長いから歩く時に下駄が高い、それですからどうしても踵の方から足を上げて外から廻して足を出さなければ進めない、詰り半圓形を描いて前へ進みます、それから八文字の歩き方と云ふのは卽ち内足は美觀であると云ふ代表者にもなりませうけれども、此衣服と云ふことが大變に關係のあると云ふ根據になります、それからして此外踊などに付ても大いに關係があるか知れない、日本の踊です、是は段々西洋風になつて姿勢を美しくすると云ふことは何人も冀ふ所ですさうして其舞踏と云ふのは姿勢を美しくする、西洋では舞踏をやらせると云ふことは、身體のこなしを和らかにする爲です、日本でも同じことです、德川時代には踊は盛んであつたが、明治維新後種々の關係上舞踏をやらぬやうになつて居ります、それから踊の方ではどうなつて居るかと云ふと、過日物故さ

れた森篤次郎君に聞いたのですが、殊に芝居に面白いのは日本では男子が女子を扮する、さうして男子は如何にして女子を扮し得るか、先づ歩きつきが婦人である、私は尚ほ森君に、何か矢張名優の言ひ傳へでもないかと云ふと、別に記錄に足つきは書いてない、足つきの書いてあるのは、舞臺で以て婦人が膝を立てることです、其場合に必ず横向になつて見物人の方の膝を立てる、是は婦人の思想を能く現はした注意だらうと思ふ、見物人の方に向つた方の膝を立てるのであります、是は大變美觀を重んずると云ふ婦人の考へを能く代表した舉動であります、男であるとどつちでも構はないが、併し婦人なれば決してさう云ふ風な不行儀なことをせぬ、見物人の方に膝が見えるやうなことをするのは婦人には必ずないことでありますから、さう云ふ風な注意はあるけれども足つきに付て注意はない、併し踊を踊る場合には注意してあります、股を開くと云ふことはしない、男が婦人を扮して踊る場合でせう、半紙壹枚股の間に挾んで落ちないやうに股を縮めて居るものである、其位八ヶ間敷く言ふて居るのであります、股を縮めやうとするには必ず内足になつて來ます、ですから是等もどうも多少内足に付て影響があらうと思う、作法も確とした記錄はありませぬが、恐らくは影響があらうと思ふ。

それから座ると云ふことも影響があらうと思ふ、此座ると云ふことは日本特有であります、世界でないのです、例へば胡坐をかくと云ふことは、土耳古人彼斯人等は胡坐をかきますが、全く日本人のやうな工合に足の踵を臀部の所へやると云ふことは是は日本特有です、それからして西洋人は坐ると云ふことは椅子に倚るのであるから、吾々の坐ると云ふことは西洋人にはどうしても分らない、それですから座るのは胡坐をかく如く考へるのであります、日本人の考へるやうに胡坐をかくのではない、正しく座ると云ふ場合には足と足とが重つて踵の上へ恰度臀部が乘るやうになる、併し座り方が非常に澤山あつて

私が或茶の湯の先生に聞いた、茶の湯の先生などは、少し草臥れると、お衝立と稱する座り方をするのださうです、チョッと足を開いて居るのです、さう云ふ風な座り方はチョッと六ケしい特別の座り方であります、兎に角正しく座る時分には、爪先が重なつて足の蹠の上へ臀部が乘る譯でありますから、どうしても正しく座つた場合には、少くとも膝から下は内足になります、是は吾々が座る結果、獨り婦人のみならず、日本男子も多少西洋人とは違つて居ります、それであるから座ると云ふことも關係があらうと思ふです、此日本人の座ると云ふことは是も何時頃から座るかと云ふと、日本人が馬來から來たか、朝鮮から來たか、或は滿洲から來たか分らぬけれども、何れにしても疊が出來てから座るものと思つて居ります、鎌倉時代の雛樣のやうに一疊敷の所に座つて居る、其以前には疊がなかつたかも知れませぬ、疊が一杯に敷けたのは近頃のことです、兎に角座ると云ふことは極く古い、九州邊で發掘して居る土人形が座つて居ります、それでありますから此座ると云ふことは我國では神武天皇以前のことであるやも知れぬ、兎に角今日の如き座り方と云ふものは古いものに相違ない、此座り方と云ふものは、餘り餘論に亙りますけれども、或人などは人體に影響すると云ふ說がありますけれども、果してどう云ふものであるかそれは六ケしい問題であります、何千年來斯の如く座つて居れば、吾々は足が短くなると云ふ理窟は實際宜しいけれども、併し一方の議論から言ふと、動物には總て種類があります、犬の種類でも色々な種類がある、同じ人間でも足の短かい人間もあつたに違ひない、又長い人もある、亞弗利加邊りには足の長い者もある、斯う云ふ風なことは一概に西洋人と云ふものを一位に置くからいけない、西洋人と云ふものは開闢以來一番手本になると云ふ譯ではありませぬから、或は日本人が人間の一番良いと云ふ手本になるかも知れませぬ、或は足の短かいと云ふことは人種であるかも知れない、座ると云ふことは宜

いかも知れない、斯う云ふやうな問題は大變六ケしい問題です、俄かに解決することは出來ないが、兎に角座ると云ふことは内足になると云ふことに多少影響があるであらうと考へて居ります。

其外履物も内足に關する點があらうと思ふ、新らしい下駄を穿くと爪先が内へ行くことがあります、是はどう云ふ譯かと云ふことを頻りに自分でも考へて居りました、鼻緒の關係でも子趾の方が足が低いのであります、眞直に巧く這入らない、それで下駄が少し内へ向いたり何かするのではないかと思ふのです、それですから下駄の關係も多少ある、往來で人の歩きつきを見ても、下駄のみが内足になつて居つて、下駄の上に乘つて居る足は眞直になつて居る人が幾らもあります。

それから是は或婦人の意見でありますが、タボ髷が大變關係するだらうと思つて居ります、昔流に「タボ」を出すと云ふと、能く手拭などを襟へかけて頸を拔衣紋にするでせう、此際足を外に開いては巧く歩けない、「タボ」は關係しやせんかと言はれて、非常に尤もなる理窟と思つたのです、恰度猫脊の關係と同じことであります、さう云ふやうな工合に、内足に關係するだらうと思ふ條項は非常に多うございます、ですからそれ等の内のどれが主なる原因であるかと云ふと、どうも言ふことは出來ない、然らば今度來る問題は長い間内足に歩くと云ふことは、是は遺傳で斯うなつて來て居るかどうかを、それを調べやうと思つて私は一日淺草の往來を見て居りました、自分の姿勢に付て何等の意思を有せざる女の子を見たのです、日曜日には二百人や三百人は直ぐ見られるが、皆さんが小さな子供を御覽なさい、大人の歩き方とは違つて居る、内足の人は少しもない、股を廣げて歩いて居る、外輪に歩くとかして居る、それが段々大きくなつて、十分に體力が付いて來ると小股に歩きます、小股に歩くと内足になつて來る、それから大多數日本人が内足に歩くのは赤兒の時分からでなくして、實は風俗の影響を受ける意思が出

來てから行はれて來るものではないかと考へた、それは子供と比べて見ると直ぐ分る、どうしても七八歳から身なりに氣を付けろと言れるやうになつてから起る歩き方ではないかと思います、多數の女子の中には何等の意思なく内足に歩く方もありませうけれども、其中には風俗上の意味を了解して内足に歩いて居る方もあらうと思ひます、それで我國婦人の大多數に於ける内足は子供の時分になくして七八歳頃になつて、自己の姿勢に注意を要する時からであると、斯う考へました。

それで然らば斯う云ふ風な内足の議論と云ふものはどう云ふ風の動機で提出して來たかと云ふと、何か歩きつきなどはどつちでも宜いぢやないかと云ふことでありますが、先程も或る婦人の話されたことには、西洋風の體操では足を四十五度に開くと云ふことになる、所謂爪先を開くと云ふことになる、それから作法の先生は眞直に歩けと云ふ、所が家のお婆さんが内足に歩けと云ふ方があると假定する、さうしますると家庭と學校の間に於て、婦人の足つきが區々になつて居ります、西洋の作法の時分にはどう云ふ風に歩くと云ふことは聞きませぬが、兎に角一般に今日の世の中に多く現はれて居る婦人の足つきと、學校で教へるのとは少し牴觸して居る、それですから是はどうしても一致させる方が宜しいだらうと思ふ、それ故に現に私は御茶の水の高等女學校を參觀に行つて、特に足つきに注意して見た、彼の學校では靴を穿くから大多數は外足です、殆ど四十人が一組でありますが、其中二三人しか内足の者はありませぬ、私が見て居たので、殊更に外足に歩くやうな人もありました。教場へ這入るのを見ると皆外足で靴を穿いて這入つて行くのです、其中二三人の生徒は内足は殆ど病氣と云つて宜しい位で、自分の意思に依て外足に出來ないのでありますから仕方がありませぬ、御茶の水の高等女學校は他から選拔になつて這入ると云ふ者がある、さう云ふ突然這入つて來る生徒には内足の人が多くございました、兎

に角御茶水の學校は少しは外足論になつて居りはせんかと思ひます、それですから家庭と教育社會とを一致させたいと云ふことを第一に考へて居る。

第二には、先程述べた通り、婦人の風俗のみではありませぬ、姿勢なり身體なりに付ての注意を要すると云ふことは無論のことであります、例へば當時新聞などに書いてある化粧品の輸入超過したと云ふことは宜くないのであります、化粧品類の輸入が超過したと云ふことは内足外足に影響はない、内足外足は費用を要せずして直ちに出來得ることである、直ちに出來て美觀であり美しいと云ふことであれば多言を費さずして直ちに實行して宜しいことゝ思ふ、それで私の考へでは、段々考へた結果日本風俗の影響として、日本人の多數の婦人には内足が多い、併し學校では外足になつて居る、世界中の婦人は外足が多い、外足は自分の身體を支へるのに都合の宜いやうになつて居る、先づ外足を以て普通とする方が正しくはないかと云ふ考へなんです、唯外足と云ふものは美觀を減ずるか、日本婦人が今日の如き衣服を著て居つて、美觀を減じはせぬかと思ふけれども、其懸念は無用であります、何となれば天保以前から元祿、徳川時代の浮世繪は皆外足であります、婦人は外足に歩いても美人たるを妨げない、殊に靴を穿いて歩くならば必ず外足の方が直覺的に美しいと思ひます。

それから尚ほ、是からのお方はどうしても、足弱と云ふ譯ではないが、男子と同等に歩行すると云ふことをしなければならぬ、男子と同等に十分に歩行する時分には少し外足にして歩かなければならぬと云ふのです、内足だから足が弱いと云ふ譯ではない、併ながらどうしても外足に歩く方が體重を能く支へると云ふ場合には、どうしても生理的理窟に適ふことになります、生理學上から外足の方が體重を能く支へる、それ故に自今十分男子と同等に歩行しやうと云ふには、男子と同じやうに歩くが宜い、唯男子と異なるのは、大踏濶歩せずして、小踏促歩する、

俗說に獨逸の婦人は誠に重々しく歩く、(鈍重の意)佛蘭西の婦人は踊りながら歩く(輕快の意)日本婦人は疊ざはりを音を立てゝ歩くと云ふことは、日本の禮式に於て八ケ間敷く言ふ所でありますが、輕く歩くと云ふことは姿勢中最も努むべきことでありますす、外足に歩いても十分輕く柔やかに歩けるに相違ない、それ故に今後どうしても我國婦人に於ては、段々袴とか、靴とか、或は束髮と云ふやうなものが流行されましたから、外足にする方が宜いと思ひます。

尙ほ姿勢に付て、少し屈み腰でありますが、此屈み腰は座つて居ると、勢ひ前に屈んで來ます、自分の筋肉の力が草臥れて來るから前に屈むのであります、日本流に座ると云ふことは骨が折れるのであります、それも關係致しませう。

其次には、餘り姿勢を眞直に歩くと云ふことは多少婦人の謙德を害すると云ふやうな疑ひがあつて、それで少しく屈み腰にしたのではないかと思ふ、或は又男子の俳優が女子を扮する時分には勢ひ身丈を縮めると云ふとから屈み腰にしたのではないか、斯う云ふやうなことが原因となつて日本婦人が屈み腰になるのであらうと思ふ、それは矢張十分に長丈の高い人が立派であります、唯四疊半の座敷か八疊の座敷に座つて居る場合には兎も角も、西洋風に社交場裡に立つ人は、どうしても身體の大きい者が餘程立派であります、それであるから西洋婦人は努めて身丈を高くする、身丈の低い者は靴底を高くする、家の中で歩かして見ると非常に身丈の低い人よりも身丈の高い人が立派に見えます、是等は何でもないことですが、さう云う風に人が身長を高くしやうと云ふ考へになつて居ります、社交が盛んになれば身長を延さうと云ふて身丈を眞直にする、從つて屈み腰にすると云ふことは日本人は必ずなくなります、皆さんが人形を御覽なさい、人形に屈み腰の者はありませぬ、首だけはチャンと下を向かなければならぬが、背中は眞直になつて居ります、さう云ふ風な工

合に人形などに付て見ても眞直になつて、唯首だけ少し下げるとか、伏目がちにするとか云ふことになつて居ります、又猫脊と云ふやうな者がどうしても屈み腰に自然になります、それでありますから、唯昔の諺の通り外足の過ぎたるは猶は及ばざるが如し非常に見悪いのであります、寧ろ及ばざる内足の方が宜しいかも知れぬ、どの途、其中庸を採らなければならぬ、兎に角外足に歩くと云ふことが正しからうと云ふ考へであります、どうか此足つきに付ても、皆さんと會つて研究したき考へです。

今日は婦人の歩容と云ふことを述べて、皆さんの御判斷を願ひ、若し是が宜しいと云ふことになれば努めて外足に願ふ、それは悪いと云ふことであればさう云ふ風な理由を雑誌に書いて戴くと大變に面白いと思ひます。

叢談

種痘の話

醫學士　河野衛君述

昨年から本年へ掛けて、天然痘が大變に流行しまして、始め神戸から起つて、大阪、和歌山、愛知、佐賀等各地に發生し、遂に東京に於ても大流行を來しました、今回の流行は實に、殆んど日本全國に渉つて居るのであります、私は玆に種痘の事に就いて御話しを致さうと思ふのであります、それに付いては、天然痘といふ病、及び之を豫防する方法―種痘の歴史、種痘に使ふ痘苗の事天然痘の流行抔の事柄に就いて、少しく申し述べて見たいと思ふのであります。

天然痘

といふ恐ろしき病は、昔から世界各國に流行したも

のでありまして、數多の人が之れが爲めに斃れ、實に慘憺たる殘害を逞うしたものであります。
我國では、昔は裳瘡或は豌豆瘡と唱へられて、之れが始めて我國で流行したのは、聖武天皇天平七年といふ事が歴史に載せてあります、そこで史家の說に依ると此痘瘡は、始め支那から我國の筑紫へ渡つて來て、それから、全國に蔓延したのであらうといふ事であります、始め痘瘡が流行した時之れを異病と唱へて、患者を山の中に別居させて、離隔し、或は神佛に禱つて病の去るのを祈つたものであります、支那では何時頃から、痘瘡があつたものかと申しますと、色々な說があつて、固より判然としませぬけれども、中古に隣邦から、入つて來たものらしいといふ事であります。
西洋に於ても、太古の事は能くは分つて居りませぬ、歴史上一番始めに痘瘡の流行した土地は、中部亞細亞であつて、西洋には、十一世紀に大流行があつて、其後十六世紀にも又大流行があつたと言ふ事であります。
明治二十九年と三十年とに、東京に大流行がありましたが、二十九年には患者の數が二千五百三人で、死亡七百二十八、それから三十年には、患者が六千百六十二人で、死亡したものの數が二千七十一人であつたのであります、今回の流行は殆んど全國に行き渉つて居りまして總數は二萬人にも達して居るといふ事であります、初發以來東京は千人以上に上り、神戸では、昨年は八百三十七人本年に入つては、四千以上大阪は本年一月から二月二十一日迄の所で、九百三人もあつたといふ事であります、それから今日に至る迄各地で新患者が續々と出で居りますから、一切を合せますと餘程大きな數になります、恐るべき大流行であると謂はなければなりませぬ。

種痘の事

一度天然痘に罹つた事のあるものは、二度目の流行の時には之れに罹らぬといふ事は、昔から人の知つて居る所でありました、それで昔から、天然痘患者の

著けて居た衣服を健康な者に衣せたり、或は天然痘の毒を人にうつしたり、或は患者の痂皮を取つて、之れを健康者の鼻の中に入れたり抔して、人工的に健康な人に病毒を移して、天然痘に罹らせて、豫防さしたものであります、此れは經驗上斯くの如くにして發生した天然痘は、經過が輕くて天然痘流行があつても之れに感染しないといふ事を人が知つて居たからであります、此方法をば傳痘法と唱へまして、西洋の書物を見ると、既に二千年も昔から、東洋特に、支那印度で盛に行はれたものだと書いてあります、其他世界各國野蠻の民でも行つて居たのであります、此方法は一千七百十七年に土耳古コンスタンチノープルで英國公使夫人モンテグーといふ人が實見し、甚だ有效であるといふ事を知り、それから之れを自分の子供に行ひ千七百二十一年には、英國に輸入し、それが始めとなつて、英國で盛に行はれ、始め佛國に入り遂に歐洲の諸國に擴まりましたけれども、獨逸では中々盛んに反對する者がありまして充分に廣まる事が出來ませんでした、然るに此傳痘法は、甚だ危險な方法でありまして、皮膚病、黴毒、結核其他の病を人から人に傳染する事もありまするし、或は傳痘法の爲めに、重い天然痘を發し、死亡するものも尠く無かつたものであります、それで千八百三十五年に至つては、獨逸は法律を以て、此れを禁じ、英國は千八百四十年に法令を發して、傳痘法を堅く禁止しました即ち傳痘法といふのは、人の天然痘毒を人に移して、輕い天然痘に罹らせ、そうして、天然痘の豫防法としたので、東洋から、西洋へ渡つたものであるけれ共危險な方法であるから、法律を以て禁止せられたのであります

然るに殆んど此れと同じ時代に、牛の乳房にも、人間の天然痘に能く似たものがあつて、人間も之に感染する事がある、そうして此れに感染した者は、天然痘の流行があつても之に罹らぬといふ事も人の知る所となりました、即ち牛にも、人間と同しやうな痘瘡があるといふ事が分りました、それでプレット

といふ人は千七百九十一年に三人の小供に、牛の痘瘡毒を接種した事がありました

然るに一千七百六十八年英國のゼンナーといふ人がまだ學生時代であつた頃に、一人の女が、ゼンナーに向いて言ふには「私は牛の痘瘡に感染した事がありますから、此後天然痘に罹る事はありませぬ」といふ話しをした事があります、ゼンナー氏は此話を聞いて、非常に興味を感じ、色々苦心して研究しまして、一千七百九十六年に至つて、始めて、種痘法を發明しました、其法は、牛乳を搾る女子が、指の先きに、棘で負傷した、其手で以て、痘瘡に罹つて居る牛の乳を搾つた所が、負傷した所に、痘瘡が傳染して、膿を以つた出物が出來た、其の指の先きの出物の汁を取つて、一人の小供に接種した所が、同じやうな發疹が出來た、それから、此れを順次に他の小供に植えた所が、何れも天然痘に感染しない事を確めました、それから氏は尚續いて熱心に研究して、一千七百九十八年に至つて、牛痘を人に接種すると、其人は天然痘に罹らぬものであるといふ事を公表したのであります、此のゼンナー氏の大發見が、そもそも今日の種痘法の始めでありまして、爾來氏の方法が安全で、學問上確實なものであるといふ事が一般に認められて、全世界に廣まり、各國は法律を發して、此法を施行するやうになりました、それ以來始めて、痘瘡といふ病が非常に尠くなりまして稀にあるといふ位になつて來たのであります、實にゼンナー氏は人類の大恩人と謂はなければなりませぬ

種痘規則

ゼンナー氏の發明した種痘法の有效確實のものである事が一般に認められてから、各國は、種痘規則といふものを發布しまして、天然痘の豫防を勵行するやうになりました、それで此種痘規則を一番始めに發布しましたのがバイエルン國で、千八百七年であります、それから千八百十年には丁抹に種痘規則が出來瑞典は千八百十六年に法律を發して、小兒に必

らず種痘しなければならぬといふ事を規定しました、それから次いでバーデンハンノーベルブラウンミワイグ杯に於ても種痘規則が出來まして、其れ以來痘瘡は極めて稀な病となりまして、千八百二十年代には、未だ天然痘を見た事の無いといふ醫師がある位になつたのであります、然るに、千八百六十年から、七十年に掛けて、獨逸に大流行がありました、それで、千八百七十四年に獨逸政府は、更に種痘規則を制定しまして、生後一年以内の者に初度の種痘を施し、次に十二歳になつて二度目の種痘を施し、二十一歳になつて、軍隊に入る時分に三度目の種痘を施すべきを規定いたしました、その後多くの文明國には、獨逸に倣つて、種痘規則を發布しました、我日本には、明治十八年に種痘規則が制定せられまして、生後一年以内に種痘し、後五年乃至七年毎に二度目、三度目の種痘を施すべきを規定してあります、佛國では二回目の種痘は、二十一歳の時としてあります、墺國では二度目の種痘は就學の時三度目のは軍隊に入る時と定めてあります、英國では千八百五十八年に種痘規則が制定されたのであります

斯くの如くに、種痘法が勵行せらるゝに至つてからといふものは、痘瘡に罹るものゝ數が非常に尠くなつて來ました、例へば獨逸では、千八百十二年には、人口百萬に就いて、痘瘡の爲めに死亡するものゝ數は、二百六十二人であつたけれ共、完全なる種痘規則が制定實行せられてからは、非常に減じて來まして、例へば、千八百八十六年から千八百九十三年迄の統計を見ますと、百萬の人口に就き、痘瘡死亡者は、一人乃至四人位に減少して來たのであります、然るに露國では、種痘法が普及して居りませぬから、死者の數が非常に多くて、人口百萬に就き百〇七人から、二百三十三人といふ大數であります、更に瑞典の統計を見まするに、種痘法の普及しなかつた時代に於ては、千七百七十四年から、千八百一年迄に痘瘡に罹つて死亡する者が年々二千五十八人もありましたけれ共、千八百十一年から、千八百五十五年即

ち種痘法が普及してから後は死亡者の數は年々百八十九人に減少して來たのであります、英國では、强制種痘規則といふものがありませぬから、千九百一年から二年に掛けて、倫敦で大流行がありました、以上述べました如くに、此種痘といふ事に就いては、各國共に、法律規則を制定して居りまして、種痘法の普及して居る所は、天然痘患者が尠く、隨て死亡數も少いけれ共、之れに反して、種痘の充分に勵行せられて居らぬ國では、痘瘡に罹るものが多い事は、統計の上から、明白な所であります、それで種痘の利益が一般に承認せられて居る今日では、種痘普及の程度に依つて、國の文野を卜知する事も出來ると謂つて差支ありませぬ、凡て傳染病の流行があると、人類の不幸は固よりの事一國の生産力を減殺し、其殘害の及ぶ所は誠に大したものであります、衛生の普及して居る國—各個人に明確なる衛生思想があつて、社會的衛生の進歩して居る文明國では、惡疫の流行は尠いけれ共、文明の低度の低い國ではドーモ惡疫の流行が多いものであります、文明といふものは、電車や電話や鐵道のやうなものが盛に設けられて、夜會や舞踏ばかりが盛んで、贅澤を極め、飽食暖衣するのを意味するのではなくして、外部と同じく、個人の頭の中も進歩して居らなければなりませぬ、惡疫の流行は、恥辱であると心得て、社會各階級の人は、眞面目になつて、人類同共の大敵たる惡疫の流行を防遏する考へを持たなければなりませぬ、それに、小供に種痘するのは、可愛相だからいやであるとか、己れのやうな丈夫な身體には痘瘡抔の附き纏ふ筈は無いから種痘せぬとか、或は譯も知らずに、以前種痘した事があるから、種痘した所が駄目であるから種痘を受けぬとかいふて、自ら進んで種痘をせぬものがありますが、斯いふ無智の人があつては實に困つたものであります、或所で子供に種痘したらば其子が死んでしまつた、全く種痘の爲めに生命を失ふたのであるといふので、其父親は、自分に種痘するのを嫌つて、ドーシテも種痘を受け

なかつた所が、遂に天然痘に罹つて死んで了つたこいふ事を聞いた事があります、それから二月の本誌には玉の腕とかに種痘の痕跡を殘すのは美觀を傷けるから、種痘をするのが嫌いといふ人があるかのやうに書いてありました、事實の眞僞は知りませぬが或新聞では、腕に種痘の跡を留るのは、服裝の上から都合が惡い、それで西洋の婦人は、大腿に種痘をするが、之れに倣つて、大腿に種痘すれば成程腕に痕跡を殘さずに濟むけれ共サテ大腿に種痘を施して貰ふのは、極まりが惡いといふので非常に弱つて居る婦人があるといふ記事のあつたのを見たやうに覺えて居ります、恐るべき惡疫が目の前に暴威を逞うして、日日に新患者が續々と出で居て、避病院を急いて設ける、新設避病院附近の住民は、擧つて病院設置に反對し叩き壞はして了ふ抔といふ大騷ぎを演じ、當局者は骨を折つて、種痘を勵行して、惡疫を豫防しようと勉めて居る時に、種痘を受けるのが嫌いじやとか、極りが惡いとか言ふて戯談のやうな積りで居るべき筈のものでは一體無かろうと私は思ひます、斯ういふやうな事を言ふ人があるとすれば、それは、病が如何に恐ろしいかをヨク知らぬからの事でありますけれ共、敎育のある人にコンナ考へを持つた人があつては實に遺憾の至りであります、惡疫の流行といふ事は社會公衆の利害安寧に關する大問題でありますから、人々が眞面目になつて、其撲滅を講じなければならぬ事柄であります、然らば、

何の爲めに種痘をするか

といふ事から御話し申しましよう、種痘といふ事は、天然痘を豫防する上に於て、最も完全な方法なのであります、簡單に言ふと、種痘といふのは人爲的に輕い天然痘に罹らせて、そうして重い天然痘に罹らないやうにする方法であります、昔の人の考へた理屈も矢張そうでありますけれども、昔の方法は、不完全であつて、甚だ危險でありましたが、ゼンナー氏が完全な種痘法を發明せられてから、何の危險も無く理想的の豫防法が成就したのであります

さて種痘を施して、人爲的に輕い天然痘に罹らせますと、天然痘の毒に打ち勝つ所の物質が身體の中で血液の中で出來るのであります、此物質は種痘をしてから、二週間位の後に出來るのであります、それ故に種痘を濟ませた人は、天然痘の流行があつても、身體の中に此天然痘毒を破壞する物質が出來て居りますからして、天然痘に罹らないのであります、然しながら、此物質は、何時迄も保存せられるものではなくして、段々と力が無くなつて來ますから、更に一定の年限の後には、再び種痘を施さなければなりませぬ、それ故に種痘といふものは、天然痘を豫防する上に於て完全な方法なのであります、それで天然痘に感染して居るものに、件の天然痘毒を破壞する物質を身體の中に送り込めば既に天然痘に感染して居るものを治療する事が出來る次第でありますけれども之れはまだ今日の所成效して居りませぬ、それ故に、盛に種痘を行つて、天然痘に罹らないやうに豫防しなければなりませぬ、前申しました所を約めて言ひますと、種痘といふものは、人をして輕い天然痘に罹らせるのである、そうすると、其人の血液の中には天然痘毒を破壞する物質が出來て來るから、其人は、天然痘の流行があつても、之に罹らないのである、斯ういふ理由で種痘を施すのであります

活ける家（續き）

醫學士　渡邊房吉君

（十三）活ける家の秘密室

平素身を處するに公明正大で、その行ひが玉の如く玲瓏透徹、たとひ胸を割つて見せても心の底に一末の塵をもとゞめず、降り積む雪とさながらに清白純潔であるなれば、秘密と云ふものゝ元來あらう筈はなけれど、抑も人の家庭には老と若きと、男と女と、主人と雇人などとの區別があつて、其上いろ〳〵複雜な事情もあれば、何人にきかしても差支へ無いと

云ふ話しばかりはない。從つて額をあつめ、聲をひそめて、壁にも耳がありはせぬかと懸念しつゝ、密議を疑らさねばならぬこともある。八方閉め切られた一室の中には、果して如何なる密話の熟しつゝあるのか、何人にも漏らしてはならぬ、或は夫れと悟られてもならぬことがある

　我が活ける家にも數多の秘密室があつて其中で種々の機能が行はれて居る、が、其行はれて居る機能の果して何んなものであるかは、只想像にとゞまる計りで、其本當のことは全然暗黒のうちに葬むられて居るのであります

一般に分泌と云ふのは身體の經濟と維持とに必要な物質を、新に血液の中からつくることで、例令へば唾液、胃液、膽汁等の如きは其分泌液と稱せられるものであります。排泄と云ふのは之と反對で、既に身體經濟に消費つくされた體内の殘物を、身體外に排泄し去ることで、例令ば炭酸瓦斯、汗、糞、尿等の如きは即ちそれであります

我が活ける家の秘密室は分泌作用をするものか、但しは排泄器の用を辨ずるものか。何れにしても排泄管と云ふべきものを備ふべき筈であるのに、此秘密室にはこれが無い。動脈は入り込む、入り込んで毛細管に分かれる。分かれて又靜脈となつて出て行く、然るに分泌或は排泄物の通過すべき道筋は無く、其入つて行く血液と出て來る血液とを比較ても、さして特別のものが造られて居らぬ。此奇妙不可思議なる

　第一の秘密室は扁桃腺である、扁桃腺とは口腔の奥の兩側にある桃の形をしてゐる機關で、廣く口を開いて鏡に對すれば容易に之を見ることが出來る。風邪をひいて咽喉加答兒などをわづらへば、扁桃腺も大きくなつて空氣及び食物の通路を妨げることがある、かゝる場合には外科醫に就て、早速之を切り取つて貰はなければならぬ。ステールと云ふ有名な學者の云ふには、扁桃腺から澤山の白血球が出て行くが、扁桃腺の中へ白血

球の入り込むと云ふ事は無い、故に此機關は恐らく白血球の製造元であらうと

第二の秘密室は甲狀腺

と云つて、頸と胸との間で氣管の前に位して居て、左右の二つに分れてゐる、之を取り出して見れば恰もスポンジのやうなもので、其中に膠のやうな物質が詰つてゐる。月經の時には充血して之れの腫脹れることがあり、バゼドー氏病と云ふ眼の球が飛び出で、心臟が頻りに動悸をうち、やゝともすると汗が流れ甚しく、神經過敏となる病氣でも、甲狀腺が著しく腫れる。甲狀腺腫と云ふ病氣では其外の所にサして變りは無いが、甚しく此機關が腫れ出してアタラ容貌を醜くもし、又其下にある氣管を壓しつけて呼吸困難を起させる事があります

甲狀腺は人體内に於て何の役目をするものか、吾々は黑幕を隔てゝ只之を揣摩推測するにとゞまり、其精確なる事に至つては、神ならぬ身の邈乎として分からぬのであります。外科の療治で全く之を取て仕舞へば、惡液質と云つて患者の榮養が惡くなり、テタニーと云つて體の痙攣などの來り、時としては精神遲鈍になる事もある。故に人體に取つて缺く可からざる機關には相違ない

第三の秘密室は胸腺

と云ひ、一部は胸廓の中に、一部は頸の前面にある。此腺は嬰兒では可成り大きく、二歲頃になる迄には尙ほだん〳〵大きくなるが、それより後は追々に小さくなり、遂には全くなくなつて仕舞ふ。故に大人では之を見る事が出來ぬ。恐らくは此機關は小兒の生長に或る關係を持つて居るものであらうが、必ずソーダと斷言することも出來ず、又何時消失かも分らず、消失つてからも小兒の生長するのは確かである、何れにしても奇妙不可思議なる機關であります

第四の秘密室は松菓腺

と云つて、頭蓋骨を開いて腦髓を取り出して見ると、其底面にある小さな一機關である。之も何の用をなすか未だ不明のうちにあるが、昔は此中に精神が住

つて居るのではあるまいかと、あらぬ想像をめぐらしたものもあつた

第五の秘密室は副腎

と云ふもので、腹腔の中に左右一つゞゝあつて、恰も頭巾のやうに、小便をつくり出す機關である腎臟の上にのつてゐる。小供では割合に大きいが大人では小さい。其中には澤山の血管はあるが、出口及び入口と云ふべき所はない

昔しアヂソンと云ふ名醫があつて、副腎に病氣があれば其人の體の皮膚は、褐色に變化すると云ふことを發見し、副腎は此褐色の色素を造るところではあるまいかと斷定した。が、種々の學者の研究によると副腎に病氣があつても皮膚が褐色にならぬこともあり、病氣が無くとも褐色になることもある。近來副腎の中から非常に效能のある止血藥を發見したものもあるが人體に對して果して何の用をなす機關であるかは今以てわからぬのであります

第六の秘密室は脾臟

と云ひ、秘密室中の最も大なるもので、左の横腹で胃の側に位してある。大人では其長さ凡そ五インチ、幅四インチ、重さ六オンス以上であります。其構造は海綿のやうで、其中に澤山の血管が分佈されて居り、窒扶斯やマラリヤや其他の病氣で大きく腫れることがある。殊に白血病と云つて血液が著しく其鮮紅色を失ふ病氣では、驚く可き程脾臟の腫れることがある

脾臟が何の作用をするかは今以て難解の謎である。生理學者の云ふところによると、我々が食事をして胃や腸の働きが忙がしい時には、脾臟の血管は血液に溢れてゐる。餘り多量の血液が胃腸に行つては、却つて危險のあることがあるから、其一部を脾臟が吸ひ取つて胃腸へ行らぬやうにするからであると。脾臟から出て來る血液の中には、割合に白血球が多くて赤血球が少いから脾臟は白血球の製造場で、同時に赤血球の破壞される場所ではあるまいかとも想像される。されど之れ只想像にとゞまり、何人と雖

も其秘術を闡明し得たと云ふものは無い

昔の人は脾臓と氣質とは一定の關係のあるものと想像し、若し氣質の良くない人があれば「彼の人は脾臓質の人だ」などゝ呼んだものであつた。英語では脾臓と云ふ字を Spleen とかく、Spleen と云ふ字には不興とか、鬱悶とか、怒り易いとか云ふ意味もある。これは脾臓が氣質に關係すると云ふ昔しながらの思想が、文學のうちに含まるゝに至つたのであります。勿論今日の學者は昔の人に比し優ること劣りはせぬが、サリトテ脾臓の作用に就ては同じく無智曚昧であります。然らば

以上六個の秘密室

は、抑も何の爲めに設けられたのであらうか、人體と云ふ建築物の間隙と空虚とを滿たした置き物のやうなものであらうか。思ふに造物主と云ふ大建築家が、無用な物を人體内に据付ける道理がない。只我我が未だ其用を發見し得ないと云ふ迄であります。曾ては人體全身が不可思議のかたまりで、何が何やらトント分らなかつた時代もあつた。然るに各國代々の學者が一歩〳〵研究の歩を進めたので、漸く今日の程度まで知悉ることの出來るやうになつたのであります。世界の學者は歩調を揃へて、今や人體の研究に取りかゝつてゐる、萬世不易の眞理が遂には此中から發見される事であらう。曾て

浦島太郎の玉手箱

は開けて後悔の種となつた、が、

西洋の昔し話

にも次のやうなものがある。ブルーバードと云ふ男がファチーマーと云ふ婦人に一つの鍵を渡し、或一室を指して云ふには、此鍵は彼の部屋を開ける鍵ではあるが、お前は決して開けてはならぬぞよ」。恐わい者見たさ」とか、「止められる程募る」とか云ふ譬にもれず、ファチーマーも何うかして其室をあけて何が秘藏してあるかを確かめて見たく、一日漸く思ひを遂して開けて見たところが、驚く可し一室の中は

壘々たる婦人の屍骸を以て滿たされて居つた、而して此屍骸は何れも曾てブルーバードの妻であつたものが、其殘忍なる夫の好奇心の犧牲となつて殺されたものであつたのであります。我が活ける家の秘密室に於ては決して此樣な事はない、今後何人がその秘密を發見するかは未定であるが、その人の榮譽は萬生に亙つて不窮不滅であります

衛生生活の一日（續き）

東京醫科大學　A、B、生君

第三十八　晝寢の利害如何

婦人　午睡を貪ると云ふ樣な事は不都合極まつた話で、其利害如何の如きは殆んど問題に成らぬ事だと云はれる方も有りましやうが、一方には又、横濱あたりでは、晝寢を日課として、每日々々行なはせて居る女學校も有ると云ふ事ですから、全く問題に成らぬとは申されません。之れも亦一考して置く必要が有るだらうと思はれます、していけないと云ふ方は昔からの説で有りまして、行儀作法や習慣の上から此樣な事は有るまじき事と云はれるので有りましやう、又利益を說く方の人は、劇務に勞れた頭腦を晝寢によつて休養すると云ふ點を第一とするので有りまして、實際雜かしい學問でもして居るとか、劇しく精神を勞する樣な人々は、午後に少時間睡眠して置けば、其爲めに頭腦は明快に成つて、以後の仕事の上に大なる利益の有るのは事實で有ります、だから婦人の方でも此樣な難かしい學問をしたり、頭を勞して居る方には、衛生上から申せば晝寢も惡くは無いと云はねば成りません、併し乍ら、實際上婦人には一日の中で中途で一度休養せねばならぬ程に頭腦を勞して居る方は、極めて少數で有らうと思はれます、又實際晝寢を適當とする方にでも、晝寢にも程度で有りまして、二時間も三時間も前後を知らずに睡る樣な事は、害こそあれ利益は少しもありま

せん。寢牀に横に成つて毛布でも被つて、三十分間斗りも睡れば十分で有ます、併し先づ多くは家庭の婦人には決して晝寢はお勸め申ません。序に一言致して置きますが、日本に古くからの諺に、「食後直に横になるさ牛に成る」さ云ふ様なのが有りまして、つまり食事して直に横に成つては衞生上有害で有ると云ふのを戒めた諺で有らうさ思はれますが、之れは實は思ひ違ひで有りまして、此事は有害どころか却て身體には大によいので有ります。食後は食物は皆胃の中に有つて、消化の作用を盛んに行なはうさして居る時で有りますから此時靜に横に成つて居れば、他の器官に餘り用事が無いから、消化作用が最も敏活に行なはれて非常に都合が好ので有ります、然るに此時何か他の面倒な事でも致しましては、血液は其方に行かなければ成りませぬから、胃の方はお留守に成つて消化の作用は妨げられるので有ります、だから毎食後には、強ち横には成らぬにしても、直ちに他の用事に取りかゝる様な事はせずに、暫時快談して居る様にでも致し度いもので有ります。食事後だから暫時は是非端坐して居らねばならぬ其後ならば横に成てもよいさ云ふ考は無意味で有ます、但し人の前で横に成るさ云ふ事の不作法を戒める爲ならば結構で有ります、要するに只食後の少時間は靜にして居ればよいので有ります。前申した午睡の事も、若し午睡の必要が有つて且つ事情の許す人は、此晝食後の少時を午睡に宛てるのが最も適當で有ります。教師、會社員其他繁務にある人達が、午前中劇しく頭腦を費して晝食後私室に退いて十分か二十分の睡眠を取つて、元氣が大に恢復するさ云ふ話を毎度聞いて居ますが、之等は適當の事さ思はれます。

第三十九　午後の間食は如何

西洋人の事は詳しくは存じませぬが、多分日本人程には間食はせぬだらうさ思はれます、日本の人は何か機會だにあらば直ちに間食をする事さ成つて居るそれが習慣さ成つて仕舞つて居るので有ります、客人でもあらば、必ず何か食物を出さねばならぬ様に

思つて居る。加之また地方により家によつては、毎日定期的に間食をする習慣が有ります、其最も廣く行なはれるのが所謂お八つと云ふもので有ります。お八つには一寸お茶を喫して其お茶うけとして菓子、かき餅、鹽煎餅の樣なものから、パン、ビスケツトを用ゐたり處によつては立派な一度の食事として、お茶漬の御飯を召上る方もあります、又農家等では日永の時には日に食事を五度する處もあります、朝と十時と、十二時と、二時と、夜分と五回の食事で有ります、一寸都會の人には想像されぬ樣な事ながら事實なので有ります。偖て此樣な間食が身體には如何でしやうか、農家等では何分其運動が烈しいので一般に器官の作用が活潑で有りますから申す必要は有りますまいが、都會の人の間食は如何でしやう、習慣に成つて氣のつかぬ方も有りましやうが、知らず識らずの間に大なる害を及ぼして居るのでは有りますまいか。胃が食物を受取つて之れを十分に消化して腸の方へ送るには四時間斗りを要するので有ります、折角消化を終りかけて居る處へ、何度も何度も食を送られて、胃には迷惑には成らぬでしやうか。日本の家庭に胃病が非常に多い事を考へ合せますとどうも間食と云ふ事は絶對的に禁ずる樣に致し度いと思ふので有ります。何事をもしないで遊んで居るから退屈まぎれにお八つでもと云ふ事に成ります、お八つが無ければ辛抱が出來ぬ樣では日本の婦人の恥辱で有らうと思はれます、之れは全く廢止する事に致し度い。其他又來客の時に菓子等を出す事で有りますが、斯樣な事も追々は廢止する樣にして、其代り何か出し度い樣な親しい人は折々食事に招いて妻君が得意のお料理でも出す樣にしたら、遥に親密を增す點にもよからうと思はれます。以上申した間食に關しての事は、只大人にのみ申した事で有ります。間食はいけないと云つて小兒にも一日三回の食事の外何物をも與へないと云ふのは甚だ宜しく有りません、小兒は今發育の盛りで有りますから食物の要求も盛んで有ります。だから小兒に對しては三度

の食事以外に時を定めて食物を與へて宜しい。それには餡氣の多い菓子だの、未熟の果物だのを何でも構はずに與へるのは宜しく有りません、パン、ビスケット其他滋養に成るもの害に成らぬ物を撰んで定期に與へねば成りません。

第四十　夕食の注意

食事に關しては前二回の時に十分申して置きましたから最早別段述べる事も有りませぬ。夕食は三度の中最も愉快な時で有りまして、主人は一日の仕事を終て歸り來り、子弟も學校の課業を濟まして歸り、一家殘らず面を揃へて食卓に就き、食事が濟んでから後も用事が有ると云ふのでは無く、愉快な話でもして寢に就けばよいので有るから、之れ程安心な樂しい時は無いので有ります、主人や子弟の一日の勞苦を慰むる爲めに、最も妻君が腕を振つて美味を調理するのは此夕食で有ります。朝や晝の食事には十分美味を以て滿足さす事は出來ぬので有りますから、夕食にこそ十分に美味を撰ぶ樣に致し度い或る意味から申せば晝飯は滋養に富むもの、夕飯は美味いものと云つてもよいので有ります。勿論夕飯も滋養に富むものがよい事はきまつた事ですが、食物によつては滋養分には富んで居ないが美味いと云ふ物が隨分ある、此樣な物も夕食には用ゐる必要が有るだらうと思はれます。只注意を要するのは前にも申した如く、夕食後はどうも運動が十分で有りませぬから、餘り不消化の物は不適當で有ります、だから不消化な食物は其調理法によつて消化の好い樣な形にして備ふればよいので有ります。今一つ之れも前に申しましたが、夕食の時には餘り刺戟性の香味等を用ゐる事は宜しく有りません、之等の爲に興奮して睡眠を妨げられる樣な事が有るからで有ります。茶やコーヒ等の害も同理で有ります。又茶やコーヒ等で無くとも只湯水を飲む事も夜は多量の飲料は有害で有ります、湯水は晝間に飲だのは晝間の運動の爲めに汗と爲つて皮膚から出て行きますかすから害は少ないので有りますが、夜間は運動が十分で無いから湯

水の爲に胃の消化を妨げたり、又夜半頃に行かねばならぬ樣な事に成つて不愉快で有ます。

第四十一　夜の家庭を如何に樂むべきか

談笑の間に晩餐は終つて、樂しき家庭を味ふべき時間と成りました、之れからが主婦の（或は家庭の婦人達の）獨舞臺で有ります。婦人の擧動如何にて蜜の如き甘き家庭にも成り枯木死灰の如き家庭にも成ります。婦人の態度如何にも趣味ある高潔なる家庭と成つて一家中家庭を樂む樣にも成り又は紛擾亂脈の家庭と變じて御主人が不品行を始める樣な事にも成ります、又婦人の言語如何によりて子女が快活順良に人好きのする樣にも成れば、陰鬱執拗でひがんだ者にも成るので有ります、何でも無い樣な事ながら家庭の感化程重大な事は無からうと信ずるので有りまして、其感化と云ふのは換言すれば家庭の婦人の感化に外ならぬので有りますから、婦人の責任は實に重且大なるもので有ります。以上を一言で申せば要するに家庭を樂しくすると云ふ事に有るので、其爲めには第一に必要な事は面白い談話の交換で有ります。之れにも始終婦人が其談話の中心に成る樣にして面白く續けて行きたいので有ます。併し茲に注意すべき事は其面白き話は徹頭徹尾上品な高潔な話で無くては成りません、尾籠な話や淫猥な話を以て面白く仕やうと云ふのは斷じて不可で在ります。子女の居る前で淫猥な話をする人は普通の家庭には少ないが尾籠な話は一向平氣でする人が有る、此樣な話を持出して人を笑はせて得意に成つて居る人が有る、實に不心得千萬で有ります、子女を上品にするか下等にするかは斯かる處で定まるので有ります。如何に遠慮の無い家庭の内にも自ら禮儀は無くては成りません。潔き話、高き笑、之れ程樂しい事は無いので有ります。一體笑と云ふ事は愉快の表情で有り又之れの爲に一層の樂を增すと云ふばかりで無く、生理上衛生上からも非常に必要な事で有ります。笑は之れ一の運動で有りまして、之れによつて心臟の作用を高め、血液の循環を好くし、消化の

機能をも强むる事が出來るので、又一方には笑は深き大なる呼吸をするのと同じ理で有りますから深呼吸にて得る利益は悉く得られるで有ります。面白い談話と云ふ事は斯の如く非常に尊いもので有ります、之れは單に面白いばかりで無く、子女には知らず〳〵に常識を養成する事とも成るので有ります。面白い話の代りに人の惡口、僞、誹、悔、歎等は禁物で有ります。面白い話に次いで家庭を樂まし賑にするに必要なのは音樂で有ります。普通世間の婦人方がお稽古なさる諸藝の內、多く行なはれるのは茶の湯活花音樂次では書畫和歌俳諧等だらうと思はれますが、之等の諸藝の內、和歌俳諧や書畫の如きものは多くの場合に只自分を修め自分を樂ますと云ふに過ぎぬ樣に思はれ、又茶の湯活花の類は多くは氣の張つたお客樣の前に必要なもので、女の靜なるたしなみを示すには誠に結構なもので有りますが、本題の目的なる家庭の樂と云ふ點から申しますと、音樂が最も適當であるやうに思はれます、尤も其他の諸藝も各自の好みにより必要に應じて尊い事は申す迄も無く、之等のお稽古の必要な事は勿論で有ります。何故音樂か家庭に適當かと申しますと、音樂は先づ誰にでも興味が有る、老人にでも小兒にでも、男子にも婦人にも、下男下女に至る迄も音樂の趣味は一樣に持つて居るので有りますから、一人の奏樂によりて一家中が樂む事が出來る。又音樂にて高尚な趣味を養ふ事も出來る、一體音樂は誰にも入り易くて、其入り來るものは往來で聞かれる下等な音樂で有るから、小兒や婢僕は好んで其下等な歌を口にせんとする、其時に家庭で高尚な音樂を聞いて居る者は趣味が高く成るから、其樣な下等な歌には耳を傾けない樣に成るので有ります。音樂は又衞生上から見ても大に必要なもので、烈しく勞らした頭腦を休め、激したる情を和げ、鬱したる苦を散ずるには最もよい物で有ります。又唱ふ人に取ては音樂は笑と同じ作用で、循環器、呼吸器の上に大に功果があるので有ります。食後互に面白い話をして居りま

してもヽ毎日の事で有るから左様何時迄も話の材料は續かないヽと成れば自然遊びにでも出やうかと云ふ事に成るヽ其時に音樂が有らば皆々樂しく家庭に一夜を過す事が出來るので有ります、音樂はつまり一家族を家庭に結付けて置く絲と云つてもよいので有ります。併し茲に家庭の音樂に就いて一二言注意せねばならぬ事が有ります、第一音樂をやる時間を定めて置く事で有ります、音樂は面白いものであるから、それ丈け又浮立ち易いもので有る、一日中音樂をやつて浮立つて居ては家庭は亂脈で、近所は大迷惑で有ます、だから夕食後一定の時間と云ふ事に定めて、それも亦近所の都合や家人の仕事の都合では直にやめる樣にせねばなりません、所謂旦那樣の義太夫の樣に難有迷惑に成らぬ樣にして、自分よりは他の人の興味を中心として考へねばなりません。第二には又其家に相應した音樂をやらねばならぬ、小さな家で低い天上の下で狂人の樣な聲を出してピヤノやオルガンをブー〳〵云はされては老人は逆上して仕舞ふかも知れません。要するに

第四十二　如何なる音樂を撰ぶべきか

と云ふ事は、家と、人と、所とは相應したものであらば宜いと云ふ事に成るので有ります。併し其內でも矢張成べく上品なものを撰び度いと思ふので有ます、上品とは必ずしもハイカラと云ふ意味では有りません。詳細は只讀者の撰定に托すより外は有りません。併し私は特に日本の婦人にお勸め申し度い音樂が有る、外でも無い謠曲で有ります。謠曲は男子の間には隨分流行して居る樣で有りますが、女子の間には餘り行はれないのは、如何云ふものでしやうか、謠曲は決して男子の專有物では有りません。謠曲の勝れる點は一々茲に申上げずとも明な事で有りますが第一之れは其調も其歌も甚だ高尚でありまして其間に云ひ難き面白味がある。第二に謠曲をやるには横に成たり膝を崩したりしては聲が出ないから眞直に坐らねばならぬので實に行儀よく品のよい物で有る。第三に身體の上には前申した呼吸器、

循環器、消化器の上の功果は謡曲に於て殊に著しい、醫者から肺病の疑を遁かれて俄に謡曲を始めて非常に達者に成つた話も聞て居ります。謡曲の特徴は其他擧ぐれば澤山有りましやう、殊に謡曲に伴ふて居る仕舞の如きは女子の行ふべき舞として實に適當な高尙優美なもので有ます。先達北國の或る地方で仕舞を小學校で一般に敎へやうと云ふので、東京の寶生倶樂部に交渉し女敎師が一人上京したと聞きましたが、此様な輩が盛に行はれん事を希望いたします。

第四十三　就寢前にしてはならぬ事

樂しき夜を過して愈々就寢の準備に取掛りましやう。先づ就寢に先だつて、寢前にしてはならぬ事の二三を述べて見ましやう。第一寢前には興奮し易きものを見聞してはなりませぬ。小説本に耽る様な事は殊に宜しく有りません。其他書物に限らず手紙や寫眞を引出して來て繰返して見たり、感情一片の談話を交換したりする様な事も宜しく有りません。凡て寢前に餘り感情を興奮させては、床に就てから情は益々熾に成り、眼は益々冴えて何時迄も寢られぬ事と成ります、學生が往々夜巨燵に入つて小説を讀み、何時迄も寢られず、終には其様な事が續いて神經衰弱に成ると云ふ様な事は屢々聞かれる處で有ります。第二には就寢の際迄も難かしい事に頭腦を痛める事も宜しく有りません、之れも不眠を來す基と成ります、寢前には頭を痛める様な仕事は少くとも二三十分位前に止して運動でもするとか、雜談でもしてから寢に就く様にせねばなりません、書物を閉ると共に牀の中にもぐり込んで、何時迄も本の中の難かしい事ばかりを考へて寢る様では、たとへ其儘眠られたにしても、其事を直に夢に見ると云ふ様な譯で、安眠と云ふ事は出來ませぬ。之れでは睡眠は無意味で有りまして、頭腦を休むる事は十分には出來ませぬ、第三には寢前に食事をしてはいけませぬ、此事は前に度々申しました、晝間にでも間食する事は惡いのでありますから、況して之れから寢や

うと云ふ時に物を食てよくない事は明かで有ります。食たものは胃の中に溜つて居て、胃に障碍を與へるばかりで無く、又其爲に氣分が惡くて安眠が出來ず、惡夢に襲はれる事が多いので有ります。第四には寢前に湯水を呑む事や、茶コーヒ等を喫する事の害のあるのは夕飯の時に申して置きました、又飲酒の有害なる事も論の無い次第で有ります、又此空腹の時にあまり喫煙する事も宜しく有りません。要するに口からも目からも耳からも、餘り刺戟する事は宜しく有りません。第五には又寢前に夜具の中に横に成つて本を讀む人が有りますが、之れも宜しく有りません。寢て本を讀むには仰臥では本を持つ手が苦しいから、多分は伏臥か側臥で有ましやうが、伏臥の害のある事は、暫く伏臥して居れば苦しく成る事ででも知れます。心臟を壓し、呼吸器を壓するのですから苦しいのは當り前で有りますだから、已むを得ず側臥をする、之れがまた大に害が有ります之れは自分には肩が少し痛い位で他に苦痛は無いから、面白い小說でも讀んで居れば、知らず〳〵に長く成りますが、長く成れば成る程害が有る、と云ふのは側臥して本を下に置いて、讀んで居ては、十分に見え難いから、目を非常に勞らす事と成る、加之、下に置いた本を讀むのであるから、文字と目との間の距離が左右差を生ずる、而して遠きに過ぎては見難いもので有るから近くへ寄せる、其距離は一眼には差支の無い距離で有らうが他の眼には非常に近距離に過ぎる、此爲に知らず〳〵に眼を痛めて遂には不幸なる近眼に陷る事も有るので有ります。第六には今迄點じて有つた「ランプ」を寢る時に枕元で吹き消す人が有るが之れも宜しく有りません、ランプを火の大きな儘で吹き消しては、一時に油煙が上つて一種の臭氣を放つて、不愉快で有るのみならず上つた油煙は間も無く下りて來る。之れを平氣で呼吸するのは、決して衛生的では有りません。寢前に限らずランプを室內で吹き消す事は宜しく有りません、必ず室外に持去つて消す樣にいたしたい、若し已む

を得ざる場合には火を極く小くして置いて、それを部に消す様にすれば宜しいでしやう。第七には又ランプの灯を小くして室内に灯して置く事が有りますが、之れも甚だ宜しく有りません、室の中に居ては氣が附きませんが、此樣な室內へ不意に外から入て來たら惡い瓦斯の臭氣で鼻をつかれる樣で有ります、灯を小くして置くと云ふ事はつまりそれだけ燃焼を妨げられるので有りますから、妨げられて燃えないものは惡い瓦斯と成つて立つて行く事は自然の現象で有ります、寢室でも他の時でも決してランプを小くして灯して置いては成りません不用の時には全く消して置くとも亦は大くして灯して置くともせねばなりません。況んや小さくして終夜室內に置くに至つては實に亂暴と云はねば成りません。

人體の武裝（續）

KK生君

(四)血液の防禦力、既にお話し申しました通り、人體は表皮竝に粘膜を第一關門と致しまして、極力外敵の侵入を防禦します。若し創傷その他の原因で、組織に抵抗力の弱つた場所が出來て、止むなく一定數の敵に侵入の隙を與へたとしましても、慘禍の及ぶ處は、出來るだけ其局部に止めて、全身への害は極めて精巧に防ぎ止めるのであります。序だから申して置きますが、創傷をして甚だしき痛みを覺えると云ふ事も、これに關係のある有りがたい自然の仕組みだと思はれるのであります。若し創傷をしても一向痛くも何ともなかつたら如何ですか、吾々はその創傷に心付かずに居るでありませう、殊に極く小さな傷などならば、自分も人も更に氣付かないで、適宜な療治をせずに放置して置くばかりでなく、黴菌の澤山附著してゐる指や、或は不潔なる物體を以て、平氣で傷處を觸り、終に炎衝を起させるやうな事になります。それでも尚痛みがなければ、矢張其儘やりばなしにして終には飛んだ結果を來すのであ

ります。癩病患者の手が無くなり足が無くなりするのは、傷があつても痛みのない爲めに、之を等閑にするからであります。健康な人であれば、傷が痛むのは當然で、このために、いかに小さい傷でも大切にし、又色々な手當をするから害を免れるのであります。人體に、如何程の防禦設備があるにしましても、過度に之れを信頼する事は、天則の許さゞる處であります、適當なる注意と、適當なる處理とを促がすために、創傷の痛みは恩恵的の感覺であります。吾々は「痛み」それ自身を仇敵の如く惡む事は出來ない。

話は少し横道に外れましたが、再び本題に戻ります。吾々の身體が敵を第一關門で支へる事が出來ず、第二關門たる局處でも、難戰苦鬪の結果、如何しても遣り切れなくなりますと、自然の道行きといたしましては、外敵即黴菌は、終に血液中に侵入するのであります。血液中に黴菌の侵入した状態は、決して輕々視すべからざるものであります、大きな膿汁の溜つたデキモノなどを、何時までも切解せずに大切がつて置くと、膿毒症を起す事がありますが、この際には血液中に多數の化膿性黴菌が含まれて居ります。チブスやペストの様な病氣でも黴菌はドシ〳〵血液中に侵入するのであります。

血液は、その中に侵入して參りました黴菌に向つて、如何なる防禦の方法を取るかと申しますに、一部分は、再三申し上げました白血球の捕食作用に因る事が確實であります。傳染病の時にも、或は人工的に血管に黴菌を注入した時にも、血液中に捕食作用の行はれて居る事は證明せられて居ります。さうして斯かる黴菌は、白血球の體中に摑まれた儘で、追々血液の外に運搬し去られ、又脾臟、肝臟、骨髓、腎臟といふやうな器官に拘引されて、茲で處刑されるといふ譯になるのであります。傳染病の時に、脾臟の肥大いたしますのは、病理解剖學上著明な事實でありまして、殊にチブスなどに於きましては、臨牀的にも重要な徴候であります。醫者は左の脇腹を探

つて、脾臓が大きくなつて居るか居ないかに因て、或熱のある患者の病氣が、チブスであるかないかを診斷する事が往々にあるのであります。畢竟脾臓が血液中の黴菌の處刑場であるから、傳染病の際に業務擴張といふ譯になるのであります。又腎臓に於ても、有害な黴菌は、尿と共に血液中から排除されるのであります。

斯く申しました處で、この捕食作用なるものが、何時も確實に信賴すべき唯一の防禦作用でありません、のみならず、たとへこれが完全に行はれても、それだけでは不充分であります。そこで血液が有して居ります第二の方法は何かと云ひますと、これは黴菌に取て有害な一種の化學的物質であります。多くの人の研究によると、蛋白質に屬するものであつて、これがあつては、黴菌が思ふやうに發育する事が出來ないのであります。

併しながら、此物質の作用は、何れの黴菌に向つても同様な效力があるといふ譯には行かないのであります。或種の黴菌には、何時でも有效であるけれども、他の或種の黴菌は、一向其影響を被らないのであります。併し斯かる場合にでも、血液の方には、黴菌の侵入に對して迅速なる反應がありまして、早速その黴菌に相當する一種の物質が製造され、其間に一定の繁殖を遂げた黴菌は、矢張り終ひにはこの物質のために撲滅されて仕舞ふのであります。チブスといふ病氣は、一度罹ると二度目に罹ることは少いといふのは本當の事でありまして其理由は何處にあるかと申しますれば、畢竟初度の病氣の時に出來たこの種の物質が、長く血液中に存在して居るものであるから、假令二度目に病毒に觸れて、黴菌が血液中に侵入しても、卽時に死滅して仕舞ふので、病氣を構成する事が出來ないと云ふに過ぎないのであります。天然痘でもその通りであります、種痘の痘苗といふものは、天然痘の病氣と同一の性質のものであるけれども、只それに一定の方法を講じて、甚だしく病毒を弱めてあります。それ故に、痘苗を植

ゑても天然痘の樣な酷しい症狀を起さずに、其局部だけに病毒が繁殖するのであります。この間に血液の方には、この痘毒に對する盛な反應があつて一定時日の後には、痘毒の方が自然に衰微して仕舞ふのであります。さうすれば、血液中には、最早や痘毒に對しては一定の防禦的物質があるから、たとへ少數の天然痘毒が來ても、決して其暴威を振はせる事なく、早速退治して仕舞ふ事が出來るのであります、斯る作用は先天性免疫に對して後天性免疫と申す事が出來ます。

此後天性の免疫が、何れの黴菌に對しても同樣に出來るならば、吾々人類は甚だ幸福なものであります。悲しい事にさう甘くは參らないので、右に述べた樣に都合よく行くのは、却て少數の黴菌に限られて居ります。加之黴菌によつては、人體内のかゝる巧妙なる仕掛を輕蔑して、血液内で却て得意氣に繁殖する者もあります、又結核菌、癩菌などいふ面々は、流石に血液中では繁殖し得ないけれども、他の器官へ轉移した際に、一向その毒力を減ずる事なく、欲するが儘に發育するのは、誠に面憎き次第であります。

(五)毒消しの作用、黴菌が只だ人體内に侵入したと云ふ丈ならば、別段の意味もない事であります。吾人が何故にこの侵入を恐れるかといふならば、其は黴菌が一種の毒素を有し、或は之を製造して、身體組織に害毒を流すからであります。黴菌が既に第一關門を超え、第二關門を過ぎ、第三の關門たる血液中に於ても、猶甘々と生き延びて、そろ〳〵惡業に從事するに至れば、第一に仕出かす處のものは毒物製造であります。人體のこれに對する方略は先づ第一に腎臟に因て早速この毒物を排泄する事であります、事情によつては、胃腸又は表皮からもこの排泄が助けられて、中毒の慘害を免れる事があります。これと同時に大切な事は、所謂抗毒素の製造であります、即ち一方で黴菌が盛に毒素を製造すれば、人體の方では、負けずに抗毒素を製造して其毒を中和

し、全く無毒のものとするのであります。例へば、先で酸類を作れば此方では早速アルカリ性の物質を作ると云ふた樣な譯のものであります。チフテリー、破傷風などは、其著明な例でありますが、何にせよ、極めて激烈な病氣ですから、自分の身體だけでは製造が間に合はない。それ故、他の動物にこの病氣を起して、全治した頃に其血淸を取ると、中々に多量の抗毒素がある、ことを人體に注射すれば、チフテリーなどでは瞬く間に毒が消えて、見る見る患者は輕快するといふ譯になるのであります。

まだ細かい事を申せば澤山にあるでせうけれども、この話はこれだけで止めます。

育兒

乳齒の發生

シナ生君

生れてから早いのは四五ヶ月にして既に乳齒が生へる、西洋では一般に小兒が涎を盛に流し初めるのは、即ち乳齒の生へる前兆であると云ふてゐます、實際涎を流し初める頃に乳齒も生へ初めることが多いのですが、然し涎と乳齒と何も直接の關係あるのではありますまい。

涎の流れ初めるのは卽ち唾腺の變化の初まれる兆候であつて、此唾腺の發達は大に小兒の消化力に關係のあることで、生れたばかりの小兒では母の乳より外のものは殆んど一切消化する力の無いものですが、涎の流れ初まる頃卽ち唾腺の發達の初まる頃か

ら、稍〻固形物をも消化し得る能力を備ふる樣になるのであります。成人した人でも唾液と胃の消化とは甚だ重大な關係を持て居ります。齒の生へると云ふ事は實に生理的の原理に從て行はれることで、小兒が母の胎內より無事に出產出で、その後も無事に發育して行くならば、何の故障もなく手足が延びる如くは齒も亦發生するのであります。

乳齒の基礎は既に母の胎內にある中から出來てゐるので、專門家の說によれば妊娠六七ケ月の頃に於て既に乳齒の基礎を見ると云ふことであります、胎內に於ける小兒の發育に必要なる要素は、悉く母の血液によりて供給されるものでありますから、胎內に於ける小兒の發育は母の榮養如何に關係するものであります。故に小兒の乳齒の基礎を構成すべき要素が、母の血液中に缺乏してゐたならば、その結果は直に小兒の齒の發生に障碍を及ぼすものでありますす。

「懷妊してから急に齒が惡くなりました」と云ふ言葉は、屢〻多くの婦人から聞くことでありますが、之は懷妊せる婦人の食物の中に小兒の齒を構成すべき要素が缺乏してゐる爲め、自分の齒に用ふる要素を據處なく小兒の爲めに供給するからであります。又一ッ奇妙な事實は、小さい時から無暗に多く甘いものや菓子などを食ふ習慣の娘は、後來人の妻となりて妊娠せるのち、齒の病に罹り易い傾きがあると云ふ事であります。

進化論が一度唱へられてから以來、何事も之れで說明しやうとし遺傳說が出でてから種々な原因不明の病氣をば遺傳で說明しやうとする傾きがあるので、中には之を極端に不快に思ふて、何でも遺傳說と云へば反對すると云ふ樣な人もある。然らば小兒の齒の惡いのに遺傳の關係があるか否かと申しますと、どうも私はあると云ひたいのであります。小兒の齒質や齒竝はその兩親の何れかに似ることが多い、母が出齒であるとその娘にも亦出齒のがある、蟲齒で兵隊檢查に不合格に成たと云ふ人には、矢張り蟲齒

やミツツパの子供が多い樣であります、故に小兒の齒を完全に改良するには、抑もの先祖に溯つて、その齒を吟味しなければ成らないことに成る、然かし之は到底出來ない相談で、今更こんな事を言ふても初まらない話ですが、出來る相談は御兩親の注意であります。懷妊した母親は殊によく注意して自身の養生を怠らない樣にしなければなりません、懷妊してゐる人がその胎内にある胎兒の齒の爲めに養生することは一寸變に聞へますが、之は別に大したこともないので、つまり食物を注意して榮養の多い消化のよいものを食して健康を害はない樣にするのであります、母が不健康であると從て小兒の榮養も惡くなる、小兒の榮養が不充分になると、先づ生物發育の規則として比較的命に關係の薄い部分がその榮養を後廻しにされ、腦とか心臟とかどうしてもなくてはならない必要なものを先に充分に養なひ、然る後に齒の如き部分に及ぶのであります、故に碁石の樣に白い細かい齒並のよい小兒を持ちたいと思はゞ、母たる人は心限りの注意をして身の健康を害はぬ樣にすべきであります。

齒が二枚や三枚缺けてゐるからと云ふて、何も直接に生命に關係はない樣なものですが、然かし人間の體に何處は無くとも差支ないと云ふ所は有りません。今齒が惡ければどんな障碍が起るかと云ふに、第一消化の關係であります、私共が物を食する時には齒で充分かんで大きいものは細かくし、固いものは柔かにして咽喉を通過するにも易く、又消化も容易に出來る樣にして嚥下するのであります。然るに齒が不充分なら之が出來ない、從て消化が惡くなるのは當然のことであります。その外蟲齒のある爲に首や咽喉の淋巴腺に急性の腫物を生じたり、又舌に傷を生じたりすることがあり、又蟲齒の爲めに絶えず刺戟されて舌癌など云ふ命取りの病に罹ることもあります。

乳齒の生へるのは全く生理的のことですから、普通であるならばその際何の苦痛もなく、自然に生へる

わけでありますが、時には熱が出たり、下痢が有たり、或は吐いたりすることがある。之は歯の出る時に偶然かゝる病が起たので、歯とは全く別問題であろうと思はれますから、適當の治療をするのが必要であります。

西洋では小兒が涎を流したり、母指を口に入れたりすれば、之は乳歯の生へる兆候であるとし、時にはその歯の出のを助ける目的で歯ぐきを摩擦します、之も前申した如く涎と歯とは無關係であり、又歯が歯ぐきを突破て出ると云ふのでも無い故、歯ぐきを擦つてその皮をすりむいたとて歯の爲めに何の效も無いことです只自然に任かせるのが上策であります、

乳歯は生れて六ケ月から八ケ月の間に下の前歯が二枚最初に生へ、次に上の前歯が出る、七ケ月から十ケ月の間に上下の絲切歯が出で、次に奥歯が生へると云ふ順序で、凡そ二十ケ月程にて上下全く出揃ふて、小さい歯ぐきは眞珠を嵌へた樣に美しい細かい歯で充たされる樣になります。

乳歯が生へ揃てから必要な注意は食物であります。生れて一年乃至二年位の小兒で醫者の所へ來のは、腸胃「カタル」が中々少くない、その時に母に向つて小兒は何を食べてゐますかと聞けば、母は得意に成て「私の小供はもう何でも食べます、大人の食するものなら何でも平氣ですと答へるのが多い。所が之が小兒のためには極惡いことであります。

抑も歯の生へるのは涎の出のと同じことで、小兒が之よりして多少固形物を食し得る能力を備へ初める一ツの兆候では有りますが、乳歯が生へたからとて直ぐに何でも食べられると云ふわけには行きません。一年や二年の小兒には固いものは大禁物であります。柔かい消化のよいものを撰んで與へなければならぬ、初めの中は歯で咬む事も、亦唾液の力も頗る弱いものでありますから、固い物を與へれば必ず胃や腸を害ふのであります。

第二に注意すべき事は歯の清潔であります。毎朝小兒の顔を洗ふ度毎に、柔かい布を水に浸し、それで

歯をよく柔かに拭ふてやる。漸々成長するに從て、柔かい歯磨楊枝で縦に靜かに摩擦しつゝ洗てやる。初めの間は多少之を嫌がるものでありますが、遂には自然に慣れもするし、又清潔を喜ぶのが人の天性でありますから、次第に之を好む様に成ります。かくて第一の乳歯が無事に保存されて成長しますと、又第二の歯が生ずる時期になります。此歯の脱け變る時にも、亦第一の乳歯の生へる時と同様の注意、特に身體榮養の注意が必要であります。第二の歯が脱け變つて、生へ揃た後には益々歯の清潔は必要となります。

第三に一言したい事は乳歯の生へるのは通常の場合では何の障碍もなく、苦痛もない譯でありますが、時には他の病の發することであります。それは前申した胃腸の病と、その外に此歯の生へる頃は又漸々と智惠も増す時期で、少し六ケ敷言へば腦の發達も追々盛んになり、その他の神經系統も發育する時期でありますから、小兒は物事に感じ易くなり、從て又怒り易くなる、少しの事にも驚き、怒り、又泣き出す様になる。此時に處して無難に此難關を切り拔けるには、一般の食物の注意、胃腸の健康と、又天然の美しい清潔な空氣を充分に呼吸することであります。

講義

衛生學大要（承前）

醫學士　河野衛君述

死體の處置

死體を所置する法は種々でありまして、木乃伊として保存する所もあり、水中に棄てるのもあり、森林に放置するのもありますけれど、今日では一般に土地に埋めるのと、燒くのとの二つが行はれて居ります。死體を土地に埋めるときは、段々と分解して炭酸

アンモニア水のやうなものに分解して了ひます、死體の分解するのは、下等な微細生物の爲めに起るのであります、併し之は其土地の性質、棺、衣服の差異に依りて、多少の差があります、空氣がよく地中を通過すれば、分解が早く行はれます、砂地では七年位を經過すれば、骨ばかりになりますけれ共、粘土では九年も掛るといふ事であります。

土地の性質に依つては、死體は通常の如くに分解せずして、全く乾燥し、質が脆くなり、海綿を見たやうになり、時としては其儘死體の形を保つ事もあります、之れは土地が非常に乾燥して居るか、或は空氣の流通が劇しいか、或は地溫が低いのに依る事であります。

時としては死體が白色になり、丸で脂肪の如くに變化する事もあります、是れを蠟様變性と申します、之を溫めると溶けて了ひます、之れは前のとは反對で、土地に水分が多くて、空氣の流通のない時に起るのであります。

そこで死體を土葬にすると、不潔の成分が其所の地底水に混ずるものであります、それで土葬は土地、水を不潔にする源であると言はれて居りますけれ共、實際に土地を不潔にする事は存外少いものであります、それで墓地の井水を調査した人がありますが、市街の井水の方が遙に不潔であるそうであります、それから傳染病患者の屍體を土葬にすると、是れから病素を傳播する恐れがあると言はれた事がありましたけれ共、傳染病菌といふものは、地中の腐敗菌との生存競爭に負けて、永く生活する事が出來ぬものでありまして、死滅して了ふものであります、又土地の溫度は低くうありますから、病源菌が増加して、傳播するといふ事はありませぬ、虎列拉菌は二週日で死滅し、「チブス」結核菌は大抵三週間位で死ぬといふ事であります、それ故に適當な土地に、良き方法で以て、埋葬すれば、危險を起すやうな事はありませぬ。

埋葬地は高燥で、空氣の流通が佳良で、地中にもよ

く空氣の流通する所を撰まなくてはなりませぬ、又埋めた死體が地底水に達するやうな事であつてはなりませぬ、又埋め方が淺いときは、分解瓦斯が地上に出で空氣を不潔にし、深きに過ぐれば、空氣の流通が不良となり、地底水に近づくといふ不利があります、それで其深さは、死體から、土地表面迄一「メートル」の土地の層があれば、臭氣が地上に出て來ませぬ。

それから墓地と人家との間の距離も注意しなければなりませぬ、我邦では百二十「メートル」としてあります。

墓地と井との距離も可成大きい方が安全であります、通常五十「メートル」としてあります、又墓地に植物を多く植えて置けば、分解物を吸收して土地が清潔にせられます。

又墓地を耕地にしたり、或は茲に家を建つる事に就いては、一番終りの埋葬後何年の後が宜しいとかいふ事は、國に依つて差違がありますけれ共、我國では耕地とするのは、十三年後でなくては許さぬ事になつて居ります、十五年後には家を建てゝも宜しい事になつて居ります。

火葬は、埋葬の如くに、土地を廣く使ひませぬから土地の經濟上便益であります、又埋葬の如く土地を不潔にしませぬから、衞生上にも宜しうあります、歐洲では火葬は、耶蘇敎の蔓延してから以來行はれぬやうになつたのであります、我國では昔から行はれて居ります、火葬の時には、非常に惡臭を放ちますから、之れが周圍に出ぬやうな裝置が必要であります、そうして燒いた跡に殘つたものは、水、炭酸、灰分抔でありまして、是れは無害なものであります、傳染病患者の死體も全く無害のものになつて了ひます、我國に於ても、火葬場の構造は、進歩して居りますから、大都市では、煙は無臭となつて、煙突から出て行きます、それ故に、惡臭の爲めに空氣を不潔にするやうな事はありませぬ。

以上簡單に申述べました所で、不潔物を除く方法の

御話しを終りましたから、是れから章を改めて

身體榮養

の事を御話し申しましよう、最初に申し述べました如くに、衛生學の目的は、單に疾病を豫防するばかりでは無くして、此の外に、出來る限り、人の抵抗力といふものを高め、たとへ疾病に逢つても、充分に之れに抵抗するやうに、人の身體を强くする事を圖るのであります、此目的を達する上に於て、榮養といふ事は甚だ重要なものであります。

榮養の事に就いて、衛生學的の研究をしたのは、ホイトといふ人でありまして、ホイト氏以來此の事柄が始めて明かになつて來たのであります。

さて人體の榮養の目的は、吾々の身體に充分であつて、害の無い、食餌を、人體に供給するのであります。

それで吾々の取る食物は、大人であれば、其働きの出來る樣に、身體を維持するに足り、小兒であれば、其成長に足り、病者であれば、健康に復するに足るやうな資格を以て居る食物でなくてはなりませぬ。

吾々の取る食物は、色々な品から出來て居ります、そうして此食品の中には、吾々の身體にある物質を凡て含んで居なければなりませぬ、それ故に食物の中には炭素、水素、酸素、窒素、硫黄、燐、「クロール」「ナトリウム」「カリユム」「カルシユム」「マグネシユム」鐵といふやうなものを含んで居なければなりませぬ、そうして此中の或ものが缺けて居ては、充分な榮養を與へる效力がありませぬ、併しながら上に列擧したやうな單純なもの、例へば窒素であるとか、炭素であるとかといふもののみを取つても、食物としての效があるのではなくして、是等の諸元素が集まつて、複雜な化合物となつたものが始めて吾々の身體の榮養になるものでありまして、例へば蛋白質、脂肪、含水炭素のやうなものを謂ふのであります、尙此外に水と鹽類とがあります、斯くの如くに、體内に入つて榮養となすものを名けて、榮養素と申します。

併しながら吾々は上に申しました榮養素ばかりを單獨に食するのでは無くして、此榮養素を含んで居る物質卽ち食物を食つて、その中から榮養を取るのであります、それ故に吾々の食物の中には、蛋白質、脂肪、含水炭素、それから水、鹽類を含んで居なければなりませぬ。

蛋白質といふものは、食物から身體の中に入つて、身體の諸臟器を形成する一成分となり、それから熱を生じ、運動力の源となるものであります、蛋白質といふものは、炭素、水素、窒素、それから酸素、硫黄から出來上つて居るものであります。

蛋白質は人の體組織の中にありますが、之れは二つの有樣になつて居ります、その一は蛋白質は色々の臟器の成分になつて居ります、此れを器質蛋白と申します、その二は蛋白質が流動性となり、水に溶けた形で、身體組織の中を循環して居りまして、器質蛋白質の消失したのを補ふて行きまして、熱、運動の源となります、此れを循環性蛋白質と申します、身體の蛋白質は先づ斯くの如き二つの有樣になつて存在して居りますが、飢餓の如き場合に於ては、器質蛋白質は、循環性蛋白質に變ずるのであります、是れはホイトといふ人の説なのであります。

そこで蛋白質といふものは、熱、運動の源となるものでありまして、絶へず身體の蛋白が消耗せられますから、吾々は食物を取つて、其中の蛋白質を以て之を補ふて行くのであります、それで蛋白質を多く取りますと、それは前に申しました循行性蛋白質になりまして、臟器の消耗を補ふて行きますから、此れに依つて、組織の細胞が新生せられます、もしも身體勞働をやつたり抔しますと、臟器に消耗を來し、之を循環性蛋白質が補ひますから、循環性蛋白の量が減して來ます、此時は、器質蛋白が變つて循環性蛋白になります、此れ故に食物から蛋白を取つて此身體內蛋白の缺乏を補ふて行くのであります、さて體內に於て蛋白質の分解、消耗は、色々な事柄に關係するのであります、吾々が脂肪、含水炭

素、「ペプトン」のやうなものを多量に食しますと、器質蛋白の分解消耗するのを節減することが出來ます、然しながら、臓器の蛋白質の消耗は、蛋白以外の品で之を補ふ事は出來ませぬからして、少量でも絶へず蛋白質を輸入しなければなりませぬ、此器質蛋白質の消耗を節減する物質である所の脂肪、含水炭素「ペプトン」の量、その次には器質蛋白、その次には循環性蛋白質の量と此三つのものは、身體内に於ける蛋白の分解、消耗と重要な關係を以て居るのであります、蛋白質を取らなければ、身體の消耗を補ふ事が出來ませぬ。

蛋白質は、動物と植物から之を取ります、身體の中に入つてからの效力は、何れも同じであります。

脂肪は體内に入つて、主に運動と熱とになるものであります、脂肪が多量になれば、體内に蓄積いたします、脂肪は水素、炭素、酸素の化合品であります。脂肪が體内に入ると、之れは體溫の爲めに、變じて液體となつて、吸收せられるのであります、それから脂肪は蛋白質、含水炭素の如き有機食素からも出來るものであります。

含水炭素も亦脂肪のやうに、體内に入つて、熱と運動とに分るものであります、即ち人體は之れが分解に依つて溫を發生し、働作を營むのであります、植物性食物は主に含水炭素から出來て居りますから、又體に要する含水炭素は、植物性の食物から取るのであります、そうして含水炭素は蔗糖、乳糖、麥芽糖、澱粉のやうなものであります、含水炭素は炭素、水素、酸素から出來て居るものであります。

鹽類は臓器の消耗を補ふものでありまして、消化液の主成分となるものであります、鹽類は消耗を補充する量丈けを取れば宜しいのでありまして、過剩にあるときは、體外に排泄せられて了ひます。

水は血液の百分中七十八分あります、身體は百中六十五は水分であります、それ故に水は身體の成分として必要なものであります、筋肉でも大部分は水から出來て居ります、水といふものは、新陳代謝の爲

めに出來た不要物を運搬し、體溫を調節します、暑い時には汗が盛んに出て、調節するのは此の類であります、水は必要なる量以上を取ると、汗や尿となつて、體外に排泄せられて了ひます。

以上の榮養素の中で、溫熱を最も多く出すものは脂肪であります、それ故に體溫を保つには、脂肪を多く取らなければなりませぬ。

嗜好品

身體の榮養になるものは、主に蛋白質と脂肪とそれから含水炭素とでありますけれ共、單に是ればかりを食する事は出來ませぬ、吾々の食餌とするには、此れに香と味とを附けなければなりませぬ、卽ち食物は香と味とが無いと、食慾を起さず、消化液の分泌も少くて、榮養の目的を達する事は出來ませぬ、それ故に嗜好品といふものを用ひて、食物を美味となし、身體によく吸收せられるやうにするのであります。

嗜好品の働きといふものは、例へば器械に於ける油のやうなものであります、器械に油がヨク附いて居ると、器械の運轉が甘く行くのと同じであります、或は又嗜好品を使ふのは、疲れた動物を鞭打つやうなものであります、動物は打たれて、再び走る事が出來ます、併し動物に勞働の力を與へるものは、鞭では無くして、榮養品であります、それ故に嗜好品といふものは、身體を榮養するのが主なる目的では無くして、之れに依つて、食慾を增し、消化液の分泌を盛んにするものであります、卽ち消化液を分泌する腺に作用して、盛に消化液を出させます、是れは動物試驗で明かな事でありまして、犬の胃に穴を明けて置いて、そうして犬に肉の切れを見せるも、食はぬ前から、胃液分泌腺を刺戟しますから、盛に胃液の出るのを見る事が出來ます、又美食の香を嗅ぐと、口から唾液の出るのも此れと同じ事であります、凡て自分に好きな甘いものを見ると流涎するものであります、斯くの如くに、嗜好品は、消化器の粘膜を刺戟し、消化液の分泌を促す力のあるもので

あります、「ソップ」といふものは、能く病人に與へられて居りますが、是れは弱つて居る胃の消化力を刺戟し、食慾を起される丈けのものでありまして、身體榮養の目的の爲めに用ふるのではありませぬ、「ソップ」の中には榮養となるべき物質は極めて僅かに含まれて居ります。

それから嗜好品の中には、殊に神經の中樞に働いて、人を爽快に感ぜしめ、疲勞を慰し、活潑ならしむものがあります、是れは咖啡、茶、カカオ、煙草、酒精の類であります。

吾々の食物は、榮養品と、嗜好品とから出來て居るものでありまして、榮養品は體力の源となるもので、身體の消耗を補ひ、溫熱と力とを與へ、嗜好品は此等の榮養品をヨク吸收せしめるやうに働くものであります、嗜好品は用量を誤まるときは、其效力を失ふものであります、酒や砂糖の如きものは多く用ひ過ぎると消化を害するは人のヨク知つて居る通りであります。（以下次號）



質疑

問● 春陽の候貴會益々御繁榮奉賀上候陳ば肺病患者に對し「レスピラートル」は寒風の呼吸塵埃の吸入等を防ぐに用ゆるは當然なれども室內にても冬期嚴寒の際又は塵埃の起るときは夏と雖も平生使用すべき者か該品は使用嫌ひ勝のものでありますが然し夏期は外出するも晴天の日には用ゆるにも及び申さず候哉何卒委しく御教示下され度願ひ上げ候謹言

山形縣　會員　阿部　薫

答● 「レスピラートル」帶用の必要は塵埃、冷氣、刺戟性瓦斯等の直接刺戟を防ぐにあるので呼吸器系統病例之ば鼻加答兒、咽頭加答兒、喉頭加答兒、氣管枝加答兒、肺病等の豫防上甚だ效驗あるもの

でありますが其煩なるを厭ひて廣く用ひられざるは遺憾であります。

冬期嚴寒の候及び夏期と雖も暴風の際殊に騎馬、車上(電車、人力車、自轉車)人込みの場所等、又居常化學者、石工、理髪師等に於ては是非携帶せらるゝが宜いのであります。

室内に於ては特別の場合例之ば塵埃の飛散し易き業務に從ふ時を除くの外冬期嚴寒の候と雖も帶ぶるの必要を認めませぬ、何んとなれば此際他の方法を用ふるも室内の空氣を濕潤ならしむる事が出來るからであります。

問● 拜啓貴會益々御隆盛賀し奉り候陳れば御繁忙中御手數ながら左の療法何卒誌上にて御示教仰ぎ奉り候、手先きドス黒く冬期は一層甚だしくフシブシにあかぎれを生じ又夜分は脚部冷へ案火無之ては睡眠出來がたく甚だ困難罷り在り候先は右御願ひまで匆々

答● 東京牛込區早稻田　菊池よし子

右の症狀は由來接診の上ならでは兎角其の病原を知るに苦しむのでありますが、殊更に四肢の末端がドス黒いと云ふことは最も多く血行器の疾患に來る處の血液循環の鬱滯に起因するものであります、從つて四肢の冷却を覺え殊に冬期寒氣に堪へ難く又は健康者よりも凍傷などに罹り易き傾きがあるものであります、偖て其の治療は醫士の診察を得て病原に對して治療を施すことは云ふ迄もなく、其他滋養性食餌を攝りて身體の榮養を高め一定時間の安眠適度の運動をなす等專ら血液の循環を良くせんことに勤めねばなりません又精神及び身體の過勞は成るべく避けねばならぬのであります、又夜分脚部の厥冷を覺え爲めに安眠を害せらる樣のことあらば就眠前溫湯にて脚浴をされなば大に效あり、血液の循流を良くするに手足の高擧法も亦適當と思ひます即ち夜間睡眠時に至り何か一尺許りの臺を造り其上に下肢を上げ置く樣に

上肢も亦此様な工合ひにした方が宜ひと思はれます。



雑報

〇警察部長會議

全國警察部長會議は去る九日午後一時より内務省内に開會し古賀警保局長不在の爲め本會議の骨子たるべき總撰擧取締に關する協議は之れを十日に讓り窪田衛生局長會長席に着き同局の諮問案に就き種種協議したるが其主なるものはトラホームの豫防に關するものにして要は近時各府縣とも其流行益々甚しきを以て此際各々地方費を支出し學校會社工場の如き場所に對し特別の豫防法を講ずると同時に各市町村をして囑托醫を設けしめ且つ此等の醫師をして各府縣立病院又は其他の場所に於て眼科専門醫に就き一定の期間内該病の講習を受けしめ以て其撲滅を期せんとするにある由

〇亞細亞衛生大會

馬尼拉の亞細亞諸國衛生大會に臨みし内務省の北島技師日光丸にて此程歸朝されたるが本會議は二月二十六日より二十九日迄ありしが各自研究の諸説を述べ日本よりは大阪の石神亨氏結核に就ての原稿を送りたり予は飯匙蛇毒の血清療法に就き講話したり其席上熱帶地方病學會設置を議決されたり第一回は四十三年馬尼拉にて、二回目は博覽會を機として東京に開くことゝならん、比律賓全體の癩病患者は二千四百名なり此内半數は一孤島に强制收容したれば其の結果は大に良好なりしと

〇天然痘患者數

本年一月より三月末日までにて全國各府縣に發生せる天然痘患者は實に一萬四千三百六十八名の多きに達したりと斯く多數の患者を出したるは我が國民が平素衛生に不注意の結果にして豫防を怠れる罪と云

ふべし

○癩療養所補助費

癩療養所國庫補助費は四十一年度豫算編製に際し熊本を除くの外は全部大藏省の删除する所となり二十四議會に於ても一問題となりたるが該病傳播の恐るべき之を永遠に放任すべきにあらざるを以て内務省に於ては次期議會には是非とも全部補助費の計上を期し居れりとぞ

○食糧鴨と毒藥

過般來地方より市内に輸入せらるゝ食糧鴨が蜻蛉蟲にストリピンなる毒藥を注射して捕餌としたるものなれば甚しき危險ありと專ら噂せられつゝありしが今回某氏より食糧鴨の試驗を願出でたる爲め東京市の衛生試驗所長遠山博士が試驗の結果鴨の腹中に番木鼈子の切片ありて非常の害毒あるを發見したれば東京市は之が取締の必要を認め遠山所長の報告書を具して去る八日警視廳に移牒する所ありたり

○衛生とビール

札幌黒ビールの聲價は世人の熟知するところなるが這般彼の有名なる獨逸クルンバッファの醸造法に據り一大改良を加へたるものぞが特質は風味濃厚にして甘味を帶び且つ多量の滋養分に富めるを以て常に之を飲用すれば衛生上裨益するところ尠からず殊に婦人にして日夕少量の黒ビールを用ふれば貧血性其他に著しき特效あり尙ほ舶來品にスタウトなるものあれどもアルコールの含有多量なるを以て我國にありては矢張比較的アルコール分少量なる黒ビールを飲用するを優れりとす

○便利なる藥品配達

大學病院模範藥局の前に『早く歸りたき者の爲に藥を配達す』と筆太に記せる看板を掲げし家あり右は同病院外來患者にして診察は午前中に濟むも午後三四時に至り尙ほ藥の出來ざる爲め歸宅するを得ざる者の便利を圖りて設けしものなるが配達料は大學附近五錢、本郷、神田、下谷の取次所迄五錢、日本橋、牛込の取次所迄六錢、本所、京橋、芝、赤

坂、四谷の取次所迄八錢又診察せずに藥品を取る時は別に三錢を要する規定なりしと云ふ

大日本婦人衛生會記事

○大日本婦人衛生會總會及懇親會

去月二十八日(第四土曜日)午後一時より九段偕行社に於て本會總會に兼ね懇親會を開く、當日は朝來雨天なりしも正午頃より幸ひに雨あがりしを以て定刻より會員の續々來場せらるゝや流石の階上大廣間の式場も人を以て充たされ、此間樂隊の奏樂あり、會長侯爵鍋島夫人は簡單に開會の辭を陳べられ次に總裁東伏見宮妃周子殿下御病氣にて御臨場あらせられざる爲め會長代つて殿下の御言葉を會員に傳へらる、次で事務員より庶務及び會計の報告をなし、右にて總會の式を終り、夫より嚠喨たる樂隊の奏樂ありて餘興に移ると同時に眞龍齋貞水の講談(間重次郎の傳)あり、次に平豐彦氏の薩摩琵琶(吉野落)ありて後、別室に於て懇親會を開かれ、ビール、サンドウイッチ。蜜柑。煎餅。壽司(折詰め)等を供せられ、此間絶ず奏樂あり會員は各自打解けて歡語談笑しつゝありしが再び貞水の講談及び平氏の薩摩琵琶等ありしを以て一同これに赴き右終つて後、樂隊の吹奏あり、鍋島會長を始め濱尾副會長其他幹事、評議員の各夫人は夫々諸事に斡旋盡力せられしは會員一同滿足を表し、又來賓には栗本醫學博士、栗本醫學士、富士川ドクトル其他貴夫人令孃二三の外國婦人各新聞記者等にて無慮二百餘名なりしが各々歡を盡して和氣藹々の裡に散會せしは午後四時半過ぐる頃なりし、因に原胤昭氏に此日會場整理の勞を多謝す

○當日出席の役員左の如し

鍋島　榮子	濱尾　作子	高木　鐐子	山本多穂子
松平　芳子	三浦　敦子	濱田　捨子	長谷川仲子
仁禮壽賀子	土肥多威子	緒方　悦子	小川　孝子
吉武鄰枝子	田村喜代子	中濱　芳子	山口　貞子
岸　汲子	三宅　藤子	宮本　榮子	宮下　咲子

○當日の寄附者

一金貳圓　羽田三耕子
一金五圓　濱尾作子
一金五圓　伊藤まさ子
一金貳圓　玉塚とよ子

○大日本婦人衛生會現在會員數

一總計貳千〇八拾貳人

内譯

本會會員數　壹千貳百四拾八人

内

贊成會員	百六拾九人
終身會員	六拾五人
特別會員	百七拾人
通常會員	八百四拾四人

各支會會員數　八百參拾四人

内

新潟支會	百九拾六人
山形支會	百〇六人
茨城支會	七拾五人
宇都宮支會	貳百人
高崎支會	百六拾五人
米澤支會	九拾貳人

○本會及支會の入會、退會者（明治四十年度分）

一入會數　三百拾九名　内譯（本會　百拾參人／支會　貳百〇六人）
一退會數　貳百五拾七名　内譯（本會　百四拾貳人／支會　百拾五人）
一死亡數　拾貳名　差引五拾名増加

○本會の例會數（自明治四十年三月至明治四十一年二月）

例會の講師姓名左の如し

五月　澤崎寛猛君
六月　弘田長君
七月　片山國嘉君　富士川游君
十月　堀内文次郎君
十一月　横手千代之助君　富士川游君
十二月　百瀬玄溪君　富士川游君
二月　田代義徳君　富士川游君

○本會收支決算報告書（自明治四十年三月至明治四十一年二月）

收入

一金五千六百七拾八圓四拾九錢六厘

内譯

金貳千八百拾五圓八拾八錢四厘　前年度ヨリ越高
金貳千五百六拾參圓拾七錢五厘　會費
金百六拾貳圓　寄附懇親會費廣告料
金百參拾七圓四拾四錢　預ケ金利子

支出

一金貳千九百拾參圓八拾參錢貳厘

內譯

金六百拾九圓五拾五錢　報酬及雜給
金五圓五拾七錢　備品費
金千參百貳拾貳圓八錢　圖書及印刷費
金九圓參拾七錢　筆紙墨文具
金五圓拾貳錢五厘　消耗品
金百拾九圓六拾四錢　通信運搬費
金貳百七拾四圓參拾六錢五厘　集會費
金貳百八拾七圓參拾錢五厘　雜費
金貳百七拾圓八拾貳錢七厘　借家費

收支差引殘

一金貳千七百六拾四圓六拾六錢四厘

內譯

金貳千五百圓　三井銀行預ケ金
金七拾貳圓七拾八錢　東京貯蓄銀行京橋支店預ケ金
金五拾七圓九拾八錢　振替貯金
金五拾圓　借家敷金
金八拾參圓九拾錢四厘　手元有金

以上

○各支會の收支決算報告書は次號に讓る

○高崎支會例會

二月二十三日午後一時半より例會を高崎市堰代町中島氏邸に於て開會左の講話あり、出席者は正副支會長及び役員諸姉を始め數十名にして同四時三十分散會せり

一、産褥中に於ける注意　講師　乾宗太郎君

一、卵巢皮膚樣囊腫及葡萄狀畸態の標本供覽ご其說明　講師　星野傑光君

因に當日は講話の後二三會員の餘興ありたりご

○本會入會者

○事務所申込

●信州諏訪郡立高島病院豐田分院內　通常會員　井上しげ子
●京橋區弓町朝報社內　通常會員　服部桂子

○伊藤孫作氏紹介

●本郷區本郷四丁目一　通常會員　村橋ます子
●本郷區本郷五丁目四十三　通常會員　白井長子
●小石川區白山御殿町八十二　通常會員　白井貢子
●京橋區築地一ノ七　通常會員　調子みつ子
●府下南品川四丁目四〇五　通常會員　本多つさ子

○鳩山春子紹介

●本所區綠町一ノ二十九　通常會員　天野よし子

○阿部恒子紹介

●北海道札幌區北六、西一、四　通常會員　久保衣子

●北海道札幌區北三、東三、五　通常會員　笹森きく子

○近岡千代野子紹介

●臺南市守備隊將校宿舍　通常會員　志賀きち子

●臺南憲兵分隊長官舍　通常會員　角田つね子

○遠藤隆子紹介

●臺南市竹園街臺南廳長官舍　特別會員　津田貞子

●臺南郵便局官舍　通常會員　大府てつ子

●同　通常會員　岡本うた子

●臺南監獄長官舍　通常會員　上田ひな子

●臺南廳官舍　通常會員　中山ゑい子

●臺南市草花街　通常會員　畔上ひさ子

○横井忠國氏紹介

●臺南市西本願寺布教所　贊成會員　能美顯正

●臺灣打狗港打狗轄地療養所内官舍　通常會員　鈴木貫子

○濱田捨子紹介

●本郷區春木町二ノ八　通常會員　吾妻光子

○岡田德子紹介

●麻布區霞町八　特別會員　酒勾治子

○改姓

●牧原つる子改メ　稲村つる子

○高崎支會入會者

○藥谷評議員紹介

●　特別會員　南部幸子

●　通常會員　中村さつの子

○轉居

●大阪市北區天神橋筋西二丁目六二三へ　郡山八重子

●兵庫縣由良町九二三ノ一へ　内山訓子

●小石川區原町一一五へ　島田はま子

●麻布區狸穴町四〇へ　佐藤澄子

●麹町區土手三番町三三へ　佐伯すみ子

●府下淀橋町字柏木九六一へ　向山靜子

●淺草區花川戸町三二へ　高橋あい子

●日本橋區通油町二三へ　稲村つる子

●山口縣長府侍町へ　松田末子

●靜岡縣興津町清見町　山梨議子

●會員募集●

●本會ハ毎年一回(四月)總會ヲ開ク
●會員ハ會費トシテ壹ケ年金貳圓五拾錢ヲ前納スベシ
●本會ハ毎月雜誌ヲ發行シテ之ヲ會員ニ配ツ
●雜誌內容　本會雜誌ニハ左ノ諸學科ノ範圍ニ於テ凡テ神經系統及ビ精神機能ニ關スル內國及海外ノ業績ヲ網羅シ原著、實驗、臨牀講義、綜說、涉獵、抄錄、治療、統計、史談、傳記、雜錄、學會、新著、批評、文籍目錄、通信、雜報、官令ノ諸欄ニ分チテ之ヲ載錄ス

解剖學	生理學	藥物學
藥物學	病理學	衛生學
黴菌學	法醫學	神經病學
精神病學	臨牀醫學	心理學
敎育心理學	敎育病理學	人類學
社會學	動物學	獸醫學

●四十一年第七卷第壹號發行
●雜誌見本一冊金參拾錢郵稅不要

東京市小石川區駕籠町
東京醫科大學精神病學敎室內
日本神經學會
(電話番町一〇九番)

(挾付の一)

インファンチナ

小兒を完全に發育せしめんと欲せば牛乳に之を加へよ

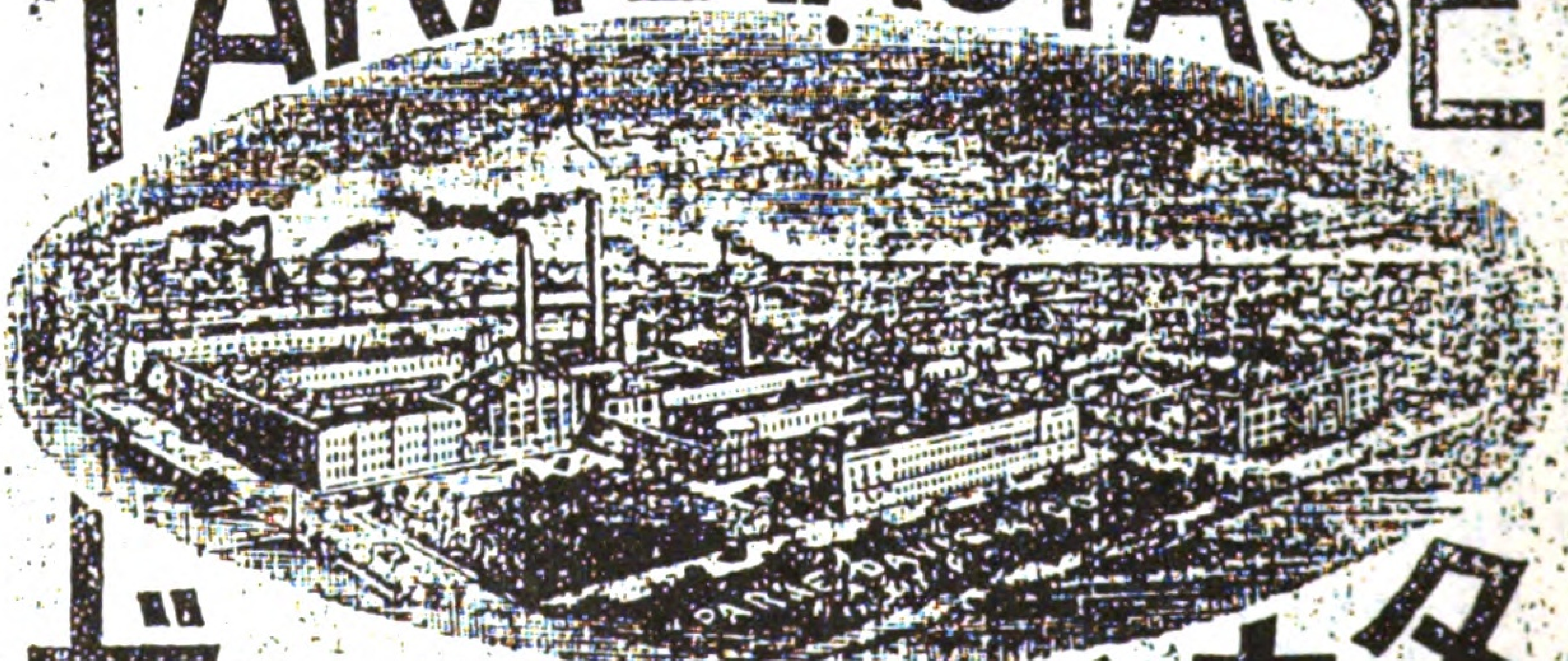
醫學博士弘田長氏曰く（上略）予も亦久しく完全なる小兒營養品を求めつゝある者の一人なり、而して坊間販く所のもの一長一短彼に可なる所あれば是に否なるあり撰擇又撰擇絶えて我意に滿つる製品なきを慨したりき、然るに客歲官命を帶びて歐州諸國を巡回したる際、測らずも完全なる小兒營養品を得たり、之れ即ちドクトル、タインハルド氏可溶性小兒食品「インファンチナ」なり（中略）其化學的集成を見たるのみにして既に本品が如何に適當に配合せられたるものなるかを知るに足る其消化性蛋白質に富めるとや、其含水炭素の大部分の可溶性なるとや、殊に多量の脂肪を含まざるとや、鹽類中にも小兒の發育に至要なる燐酸鹽類を適當に含むとや、何れも是等營養的人工製品を求むる者の理想とする所ならざるなし、而て更に之が用法を見るに小兒の年齡に依り一定量の牛乳と水とに和して用ゆべく定めたり、之れ人爲の力のみを以てしては到底不滿足にして天工を奪ひ能はざるを自認し、一半は天然物を以て之に充て其質を更めて天工に近かしめむと試みたるもの、即ち牛乳の性質を變せしめて人乳、就中小兒の生母の乳汁と同一ならしめむと欲したるなり、其考案の巧妙にして而かも實用上些の遺憾なき、寔に感嘆に値すと云ふべし（中略）予も亦之を實驗したるに消化不良に罹れるもの又は現に下痢ある者の如き本品を用ゆるに依りて之を制止す——

「インファンチナ」の分析表及用法用量は現品に附したり

「インファンチナ」は百瓦入三百瓦入五百瓦入の三種とし互れも鑵入として發賣せり各地の有名藥舖にて販賣す最寄の藥店になきときは直接照會を乞ふ

發賣元 東京市日本橋區南茅場町二番地 **三共藥品合資會社**

TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

世界最大の製薬工場

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製薬會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規模の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫藥品を製造す。

高峰氏發見消化新劑

タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。完備せる裝置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ本劑は品質純良、每瓶強度均一にして、又其效力永久不變なり。醫師及藥舗諸彥！模造品製造者の誇大なる虛僞的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の實品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徵し確認せらるべし、需用者は必らず高峰氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舗にて販賣す

代理店 東京南茅場町 三共藥品合資會社

私立大日本婦人衛生會

山形支會規則

第一條　本支會は私立大日本婦人衛生會々員山形市在住者を以て組織す●第二條　本支會に會長副會長の外幹事四名評議員若干名を置く會長副會長は公撰し幹事評議員は會長之を選任す役員の任期は一ヶ年とす●第三條　本支會は毎月一回（第一日曜日）講話會を開き毎年一回（五月）總會を開き講話の外役員の撰擧庶務會計の報告をなす●第四條　入會せんと欲するものは宿所姓名竝に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依頼すべし本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし●第五條　本會々費は會計幹事に納むべし但し六ヶ月又は一ヶ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし●第六條　服裝は精誠質素なるを要す上著及羽織は絹布を用ゆるを禁す

明治三十三年二月四日創立

事務所山形市旅籠町新築四通二百八十九、北島氏方

山形支會

私立大日本婦人衛生會

宇都宮支會規則

第壹條　本支會ハ私立大日本婦人衛生會宇都宮支會ト稱ス●第貳條　本支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク會長副會長ハ公撰シ評議員幹事ハ會長之ヲ撰任ス各役員ノ任期ハ一ケ年トス●第參條　毎月壹回（第一日曜日）講話ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改撰庶務會計ノ報告ヲナス●第四條　入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依頼スベシ本支會ヲ脱會又ハ本會ヲ退會セントスルトキニハ其旨事務所ニ届出ヅベシ●第五條　本會々費ノ外別ニ支會々費ヲ要セズ會費ハ一時ニ六ケ月又ハ十二月分、新タニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ●第六條　本支會ハ別ニ支會々員ヲ置キ支會々費トシテ一ケ月金五錢ヲ納ムルモノトス●第七條　講話會ニ出席ノ節ハ成ルベク家族又ハ知合ノ婦人ヲ誘引シ傍聴セシムベシ●第八條　服裝ハ精誠質素ナルヲ要ス上著及羽織ハ絹布ヲ用フルヲ禁ズ第九條　特ニ支會規則ニ掲ゲザルモノハ本會ノ規則ヲ準用ス

事務所宇都宮市傳馬町三十三番地、行森氏方

明治三十四年二月三日創立

宇都宮支會

私立大日本婦人衛生會

米澤支會規則

第一條　當會は私立大日本婦人衛生會米澤支會と稱し衛生上の研究を目的とし互に智識を交換し社會の幸福を増進するにあり

第二條　支會事務所は當時假に免許町一三六九番地猪股方に置く

第三條　當支會に會長一名副會長一名幹事五名を置く其任期は各一年とす

第四條　毎月一回（第二日曜午後一時より四時迄）講話會を開き毎年五月總會をなし役員改撰庶務會計等の報告をなす

第五條　入會は會員の紹介を經て宿所姓名に會費を添へ事務所へ申込又退會せんとする者は其旨事務所に届出へし

但し已納の會費は返附せす

第六條　當支會の會費は左の三種として特別會員毎月金參拾錢通常會員甲毎月金拾五錢乙毎月金五錢前納するものとす

但會費拾五錢以上納むる者には本會雜誌を配附す

第七條　會費は雜誌料として本會へ納め一部は支會經費に充て殘餘は銀
行へ貯蓄して支會事業の資金となす

第八條　會員及員外篤志者より金品の寄贈あるときは役員協議の上特
員又は贊成員となすへし

第九條　講話の節は汎く婦人の傍聽を許す

第十條　支會々員は質素を旨とし集會の際は可成木綿服を着用する事

第十一條　特に支會則に掲けさるものは本部の會則を準用す

事務所米澤市免許町一三六九

米澤支會

私立大日本婦人衛生會
新潟支會規則

●第一條　本會は大日本婦人衛生會に屬し婦人衛生の研究を目的とし兼て一般慈善事業を爲すにあり ●第二條　當支會の會費は左の六種とす終身會員一時限り出金貳拾五圓特別會員毎月金參拾錢通常會員同金貳拾錢支會員甲毎月金拾錢乙同金五錢 ●第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし ●第四條　會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衛生雜誌を配布す ●第五條　會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衛生慈善資金とす ●第六條　支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す各役員の任期は一ケ年とし再撰するを得役員は總て無給とす ●第七條　支會は毎月六日通常會を開き衛生及び慈善に關する演說をなすべし ●第八條　毎年一月總會を開き支會の要務を擧行す ●第九條　本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし ●第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は賛成員となすべし ●第十一條　一般慈善事業の賛助天災事變の救濟の事務は役員會の決議によりて實施するものとす ●第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は可成く綿服を着用すべし ●第十三條　特に本規則に揭げざるものは私立大日本婦人衛生會の規則を準用す

明治廿九年四月創立

事務所新潟市本町通十三番戸中村しげ子方

新潟支會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會會員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





○本會徽章料左の如し

○通常會員章

第三號　メッキ製拾貳錢、送費六錢

○第二號　正銀製四拾錢、送費六錢

○終身及特別會員章

第一號　七拾錢（黑塗箱入送費九錢）　六拾錢（桐箱入送費六錢）

第二條　會員章は本會竝に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

○入會注意

○御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收人差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料なども御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所所在の郵便局（東京麹町區富士見町郵便局）宛振出あるべし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

○會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌を進呈す

本誌一部定價貳拾錢

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

東京市麹町區富士見町二丁目卅二番地
發行所　私立大日本婦人衛生會
（振替貯金口座一〇六〇〇番）

東京市下谷區竹町五番地
編輯兼發行者　齋藤清之丞

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
印刷者　今井甚太郎

東京市本郷區駒込[illegible]
印刷所　杏林舍

明治四十一年四月十六日印刷
同年四月二十日發行（毎月一回二十日發行）